

J2.99:13

13 of 20

Feb. 1945
Vol. 3, no. 2

67/14
C

✓
DEFENSE

LVS War relocation authority Poston

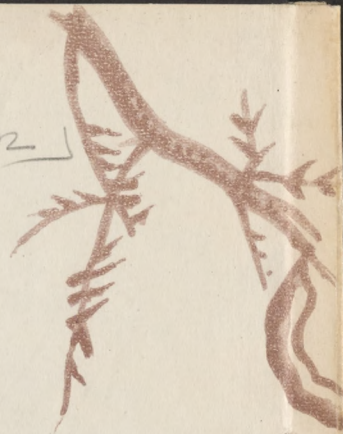


Bungei
=

文藝
丸云

ポ
ス
ト
ン

二月
號





ポストン文藝 貳月號 目次

表紙

進藤舟水

晚餐會署名
卷頭言

1

岡倉天心

翠川敏

3

歴史は繰返す

谷川江浦草

10

改変

伊藤四郎

14

家庭と児童

有田百

17

純真な心

猿渡則子

32

保壽屯雜記

大月喜三郎

30

ポストン生活

松原信雄

39

ポストン追憶

貴家志子

35

謠曲漫筆

中村正敏

45

吟詩漫筆

羽根政春

49

基漫談

大岡周洋

42

化石の語

岡本實

20

冬松の實を噛み乍ら

新関惣太郎

29

未完断想稿

青木伸明

28

ペンタ屋さん

マツイシラネ

44

自由律俳句

土田箕人

53

雷鳥・小春日和

河口・大月

54

自然と悲哀

福田さかえ

53

満座那吟詩抄

長谷川蒼逸

44

俳句四人抄

長藤行精

34

同胞行進歌

永瀬勇

56

極月歌會詠草集

島原潮風

65

選後隨錄

芳川積三

67

古川柳句解

長谷川生

82

柳川會并互選

進藤舟水

86

編輯後記

龍井謹平

73

源義光

佐渡甚三郎

73

佐渡甚三郎

芳川積三

73

源義光

長谷川生

82

編輯後記

進藤舟水

86

源義光

佐渡甚三郎

73

源義光

長谷川生

82

編輯後記

進藤舟水

86

巻頭言

希望は須らく遠大なるを要す。若し希望の狭小なる時は、随つて其の結果も少量なるべし。従し徒らに気宇のみ大にして、之を實現すべき努力と迫力と責任觀に缺くる時は、結局誇大妄想に陥れる者なり。慎むべし。

日本の史上最も後世國民に親しまれ、人口に膾炙せる人物をあげれば、一個の木下藤吉郎、後の関白秀吉公なるべし。

彼の志望は洵に雄大なりき。而も草履取の下級の職に在つても、其の職責を百パセント以上に完遂し、且つ次に來るべき命を、是れ待つての態度なりき。職責を確認し、感謝感恩、以て來るべき飛躍を待機したり。其処には職務に不満なく、嫉妬なく、只汲々乎として己の足らざる處を惟れ懼るゝ赤誠あり、反省の餘裕と喜悦とを有したりき。且つ吾人が彼を推賞稱する所以は大義名分に終始し、尚ほ孝子なりし事なり。

吾人は彼、藤吉郎の如き穎智はなくとも、彼が如く終々迫らざる大國民たる襟度を持ち、來るべき時代に、捲土重來すべき、毅然たる覚悟を促すと共に、徒らに斜陽落花の憂ひを抱かざらん事を希ふ者なり。(H・A)

冬

屋根に登つたう 脚は慄へた

冬の跡は果しなく灰色にひろがつてゐた。

電線に止つて 百舌鳥はもう声も立てなかつた。

空は銀鼠 両手をポケットに

山を眺めてゐるひとりぼつちの兎の後姿。

行方も知れぬ風に打明けたかうとて何になるか

とうとう一人息子も征つてしまつた

山脈の如いな手の甲と火箸に焼せてゐる夜更の老父。

炭の音を吸込んでしまつた霜夜の大地である

今更 何の心の動搖ぞ！

落葉は風にまかせて 黙々と立つてゐる裸木である。

岡倉覺三と 米國人の知己

幸川 敏

序

今までに 親日家とか 親米家とか 稱する文字を使つたことはなかつた。
嫌惡すると云ふよりも 斯かる曖昧^{アイマイ}な存在は有り得ないと信ずるからである。
然し 世に 知日家 知米家 は居つた。明治が生んだ最も偉大な先覺者
岡倉覺三は知米家であつたし サースビー姉妹 (Emma と Irma と
イサベラ・スチユアート (ガデーナ夫人) は 知日家の米國人であつた。
經濟關係から誘^{イザナ}われた自稱の徒輩に至つては 到底 鼻持ちがならないが
心ある知日家の中には 日本美術に心酔^{スキ}した動機から成つた人が多かつた。
イサベラ・スチユアート サースビー姉妹 岡倉覺三 に纏^{マツ}わる不朽なロマ
ンスも 東海美術によつて結ばれた縁^{ユキ}である。

岡倉覺三は幼名を角藏と名乗つたが 後に天心と號した。曾て 東洋に関心を抱いた歐米の知識階級の間では 英文で物された。

"THE IDEALS OF THE EAST WITH SPECIAL REFERENCE TO THE ART OF JAPAN"
(London, John Murray, 1903)

"THE AWAKENING OF JAPAN"
(New York, Century, 1904)

"THE BOOK OF TEA"
(New York, Fox & Darfield, 1906)

等の著者として知られてゐる。

日本で「東洋の理想」「日本の目覺め」「茶の本」等と譯して出版され如何にも新しいものを見出したかのやうに 今更ながら 先覺者を再認識したのは ずうつと後年も後年 四半世紀を経た大正の末葉であつたのだ。

私が天心に抱いてゐる氣持ちは 尊敬と云ふ文字で表現する以上のものである。好きと言ふよりも 言はゞ憑^つかれてゐるのだと云ふ方が當^たつてゐる。

天心の生涯と切つても切れないう米國に半生を送つた關係上 哲人の行蹟を實地に見聞し得たことを悦んでゐる。本篇に出て来るイー・ナ・サー・スビーさんにもお會ひしたこともあるし ボストンのフエシウエイ・コートをも訪ねて

在りし日のガーデナー夫人と天心との交遊を偲ぶだこともあった。

米國に於ける行蹟の研究資料は相當に集めてゐる。一部を日本の誌上に發表したこともあった。然し残念ながら今は手許モトにない。

頁數に限りがあり少々無理とも思ふが表題に従つて記憶するまゝ、エムマリイ・ナリカー・デナー夫人と天心と短く呼ばさせて頂いて本稿を進めることにしよう。

サースビー姉妹を訪ねて

第一次世界大戦も漸く終末を告げ日本の凡ゆる部門の識者達ヤガが總て来やうとする新時代に處する爲め我もくどと歐米視察に渡つて来た頃であつた。

紐育のグラマシイ公園に面して二百年の古色を止める宏壯なサースビー家にも或る日東よりの珍客が訪れた。歐米にも知れ渡つてゐる詩人戯曲家俳優等からなる一行が戸を敲たたいたのであつた。

南北戦争此方故あつて堅く門扉カドを開ざしてゐるサースビー家にも宛らヤガ一陽未復したやうな朗かな零園氣が漂ふたのであつた。天心を偲ぶと云ふ人々が遙々東洋より足跡の行脚に立寄つたからだ。

餘りにも先覺者であつたが故に母國には容れられず西に知己を得た天心が三人の愛弟子（横山大觀 菱田春草 六角紫水）を連れて同家の客とな

つたのは 明治三十七年 白露の風雲將に急ならんとする時であつた。此の邊で 其れに至つたまでの経緯を述べなければならぬ。

天心が遺した仕事の一つに 東京上野の美術學校の創設(明治二十年)がある。時に哲人 二十八歳であつた。

國は 擧げて 骨を抜いた歐化運動に夢中かに見えた。世の指導者達が「先進國に追着くには敢て手段を標ばない」とさへ公言して憚らなかつた時代。舊物破壊に次いで 凡ゆる部門に形式的な西洋化への模倣が急がれたのも 蓋し已むを得なかつたであらう。如何に度を離れた桁外れのものであつたかは 斯の條約改正を目標として 謹嚴そのものゝやうな維新の元勳達でさへ ショパンのウオルツに踊る姿を 芝 鹿鳴館に曝した記録を見ても 輕薄であつた當時の風潮の程が偲ばれると思ふ。其の因つて及んだ所は 洵に現在なりとも何等の自覺識見を有たず 思慮なく徒に虚勢を張る輩に限り 胸底深く「洋服は知識階級者が着る物 西洋館と云ふ所には優しい人が住んでゐる」との概念が恐しくも無意識の中に潜在してゐるのは其れが故なのだ。

東京の上野公園を焼拂ひ 不忍の池を埋立てやうとしたのも此の頃で 幸にも 南北戦争の勇士グラント將軍が來訪して訓戒を與へた爲め救はれたのであつた。

バタ臭い物ならでは夜も明けなかつた斯かる時代に 日本畫を主課目とする

美術學校の創立を見たのは 決して 天心が第一回の歐米視察（明治十九年）から飯朝して 時の當局に進言した「日本美術の確立」に動かされた爲ではなく 其れより先き 日本古美術を蒐集の目的で訪日したピケロや帝大教授フエノロサ（共に米國人）の提言に基いたのであつた。實に 日本畫は 當時東洋の一貧乏國に過なかつた日本の主要な輸出品の内に算へられてゐたので 政府要路者は繪工養成を主眼として開校させたのである。天心は其れを利用した形であつた。

斯かる風潮の中にあつて 何時までも 實利主義な當局者と協調して行けなかつたのは 寧ろ必然であつた。十年を経て 斯の史上に特筆される美術學校騒動が勃發し 校長（天心）以下 橋本雅邦 高村光雲 寺崎廣業 川端玉章等の總辭職となつた。

間もなく「日本美術院」が創立されたが 如何にせん 輸入文化の全盛期であつた世に容れられず 愛弟子下村觀山を歐洲に留學さへ 天心一行のサービス家を頼つての渡米となつたのである。

サービスビイ家には 今も猶 一行が約二ヶ年に亘り滞在してゐた當時の定蹟が残されて居るが 知つてか知らないでか 東よりの訪問者は至つて少なかつた。其處へ 久振りに 天心を崇拜する人々が戸を敲いたのであつたから 同家の主 イーナさんとエムマさんとが悦んだのも無理もなかつた。

これより先き サースビー姉妹は渡日 親しく日本の文物に接してゐたので 故人を偲ぶ間にも 日本美術を繞つて談が進められて行つた。楽しい談は何時果てるやも想像を許されない程であつた。所が茲に 此の零圓氣を瞬間の中に消し飛ばしてふことが突發したのである。一行の或る人が「天心の天才を漸く日本でも認めるやうになりました」と つい 口を滑らしたから――

「覺三の天才を漸く日本でも認めるやうになつた……」とは 一體何事です 餘人ならば いざ知らず あなたのやうな方から 而う云ふ言葉を聞かませう とは…… 私は 覺三を一目見た刹那 彼が天才なる所以を覺りました……」

見る／＼内に 顔色は蒼白に成いて行つた。妹の逆上を忤れ 姉のエムマさんは 訪問者に説びながら イーナさんを別室に引取らせるのを 餘りのことのやうに 一行は呆氣に取られ眺め盡してゐた。

白けた座に居溜まらず 同家に別れを告げやうとすると「何卒 悪く思召さないやうに願ひします。妹は生涯を覺三に捧げたのですから……」と迷べるエムマさんの言葉を 一行を夢中で聞いてゐたかのやうに見えた。

天心の米國で發表した英詩の一つ「TAOIST」(道教徒)は 米國の知己に捧げられたものであると云ふ。

天心の息が掛けられ 後世國寶的な存在と謳はれた畫伯達は 凡べて 白地

に二筋の黒い墨^{スミ}を引いて 挟まれた白地に「内よりの聲」(「I HEAR YOU FROM WITHIN」)を 浮かせる悟りを開く極意を授けられた巨匠達であつた。瀧となるか川となるかは別の疑問として 東洋の理想 東洋人の精魂は「内よりの聲」より發露されると云ふのである。

老子の思想「谷神不死」を英語に引伸し 異國の知己に訴へた天心は 健に哲人であつたが 我々が知る以前に 此の米國に故人の偉大性を認識してゐた人のあつたことを 日本人は知つて置く必要があると思ふ。

×

×

(末尾に) ボストンにあるフエンウエイコート(アートセンター)の建設者イサベラスチュアートことガーデナー夫人と天心との交遊に就いても 哲人が同夫人に捧げたと云はれる戯曲「I HEAR YOU FROM WITHIN」を繞つて書く積りでゐたが 紙面の都合で今回は割愛する。

「白狐」は歌劇の臺本の形式で物された三幕からなる戯曲で 安倍の保名と葛の葉狐との傳説から取つたものである。

ボストンの東洋美術館は ガーデナー夫人と天心とが心血を注いで蒐集した努力の結晶である。十三世紀以来の日支両畫は約四千点 浮世繪だけでも二萬点以上も集められてゐる。記憶を辿り 同館を觀賞した思出も書き度いが これも 孰れ機會のあつた折に譲ることにする。



歴史は繰返へす

谷川 江浦草

ロマン・ロオランの書いた脚本風なものに「叛乱する機械」と云ふのがある。先づ初めに複雑な機械に満ちた大宮殿がある。そこにはロボットの機械軍隊が整列してゐて傍にはその機械の生みの親である科學的天才が冷靜そのものゝ如くに立つてゐる所から始まる。大統領、大臣、學者、花の如き女優それから何とか云ふモダンガールに到る迄の機械の讚美者がこゝに集つて科學の天才を讚へ機械の完全さを讚へる。大統領はシヅ／＼と壇上に現はれると人類の遠き歴史より説きおこしての燦然たる科學文明の到来を祝福する。「満場の諸君よ、八千年の暗き世から吾々は今こそ解き放たれ遂に人類は光の絶頂に到達した。稱むべき哉、大いなる文明よ、機械よ――」大統領は獅子吼を終へると机の上のスイッチを押す。すると機械の軍隊は怒濤の如き歡呼の中に一齊に行進を起す。人々はたゞ恍惚としてこの見事なる機械の進軍に魂を奪はれる。ところが

この軍隊は人間と同じく生命と意志とを與へられてゐるので、遂に機械の惡魔性を完全に發揮して街を蹂躪し、大統領も大臣も女優もそして機械の主人である科學の天才迄も野より山の頂へ追ひ上げられて仕舞ふ。そして機械は乱舞の極み遂に味方同志衝突し合ひ、殺戮し合ひ地上から消えて行く。

そして世界は再び平和な田舎に還る。大統領は木靴を穿き、女優やモダンガールは牛乳を搾り、大臣、科學者は野良に出て鋤と鋤にて耕す。彼等は機械を怖れ再び科學の文明を夢みやうとはしない。大統領は再び壇上に歩を運び、雄辯を振ふ。「諸君！人類は光の絶頂に達した。科學は野蠻の法則と機械文明に禍ひされた慘めな昨日の存在と比べて、今日は何と言ふ光に満ち／＼た明るい世界であることよ。」そこでシナリオは終りに近づき又新らしい機械がその復活の貌を見せやうとするところで幕となる。

文明批評家としてのロマン・ローランの地位はH.G.ウェルズと共に既に確定されてゐるところである。此のシナリオを通じても分るやうに、彼の思想は歴史はくり返へすと言ふ回歸の思想である。勿論回歸の思想は今始まつたことではなく、例へばニーチェがツアラストラーをして語らしめてゐる永久回歸と同様、一つの古い／＼東洋思想なのである。ローランはその古臭い思想を持ち出して世界を説明しやうとしてゐる。否それにも増して良き幸福なる世界の實現を望んでゐるところにこの思想は新らしく生かされてゐる。

十九世紀は確かに人類が限りなく已惚れた滑稽なる歴史の一頁であつた。ダーウインの進化論を經にフィヒテ、ヘエゲル、スペンサー或はマルクスを緯とした一切の樂天主義は、「低きより高きに向ふ限りなき向上」を口にはち切れさうな精神を以つて戰つた。たゞ一途に進化し得ると言ふ希望の前に十九世紀は完全にのぼせ上り、お互ひのおべんちやらの中に限りなき陶醉を續けた。

そして次に來つた廿世紀はどうであつたか。或程廿世紀は前世紀に比べて遙かに偉大であり、その機械文明に驚異を抱かぬものは一人としてないであらう。實に廿世紀は世界史の最高峰である。この時代に住む吾々は確かにアリストテレスよりも何百倍もの知識を「有してゐる。アリストテレスに自動車の運轉が出来るであらうか。否々！然らば吾々はアリストテレスよりも進化してゐるのであらうか？然りと答へ得る人があるならばその人は幸福である。併しこの世界の混乱、鬭争そして不安、不平或は絶望を見る時に、廿世紀は進化の絶頂に立つてゐると断言し得る人が果してあるであらうか？然らば十九世紀の進歩の理論は單なる樂天主義でしかなかつたではないか。そしてこの永久向上の樂天主義が如何に禍ひであつたか吾々は既に氣が付いて居る筈である。併し人間と云ふものは最後の瞬間が来るまで絶望もしなければ降参もしない。否、最後の瞬間でも例へばノアの洪水の時でも、人は橄欖の若葉をくわへた一羽の鳩を描き、ダンテは地獄と煉獄の後に天國を描く動物である。そしてまだく

一つの逃げ路を作つて永久向上の樂天主義に酔ひ、機械文明に轢を捧げ様としてゐる。この時に當つてロマン・ローランは警鐘を乱打して、世の眠りを醒さうとするのである。世界の歴史は進歩ではない、回歸であると言ふ。歴史は絶へず繰り返へされるのであつて、ベルグソン等の創造的進化の歴史などと言ふのは實にとるに足らぬ自己満足である。吾々の幸福は限りなく進化すると言ふ文明的歴史觀の中にはないのであると説く。併し彼は時代の逆行者でもなければ、機械文明や科學を極端に呪咀する反動者でもない。否これら一切の物質的な希望と努力と成果とを、遙かに乗り越へた彼方の世界に實在を見、光の絶頂を見やうとしてゐるのである。

そして彼は印度の森に瞑想の眼を向ける。ランカシャーの紡績機械を後へにチエルカを廻はし、山羊を莫京ロンドンへまで持ち込む半裸の男、そして千ヤ一チルガ、光榮ある大英帝國の樞密顧問官と面會するには彼は余りに文明の恥だと苦虫を噛みつぶしてゐる間に、ロンドン市民が王者の如く驛頭に迎へた印度の聖者がンデイこそ、ロマン・ローランにとつては光の絶頂なのである。

吾々は今この世界の大動亂に直面して今更の如く、このジエノーヴ湖畔の哲人が悞はれるのである。

新年號表紙

「改變」

伊藤四郎

を見て感あり

貴家璋造氏の創案なる文藝新年號表紙「改變」は、我々の轉住生活の過去、現在及び未來を、物質的、心理的に表示し且つ、我々の將來に向つて進む指針を示したるものとして、私の心を鞭る。且つ喜ばしめたる近時隨一のものである。貴家氏は「改變」によつて、何を諷刺されたのであるか私は知らないが、私は物自爾の中に宿る生命の無窮なれと祈らるゝ心情の作と解する。圖案の眞髓たる所は彼の下駄であると思ふ。片方は、緒か切れ、片方は覆つてゐる。

天地の森羅萬象の轉換は、實に其の森羅萬象の生命の永遠なる事を意味する。人は死を忌み、物は滅を嫌ふのであるが、死を死とし滅を滅と考へてはならない。死は生を以つて勝たしめ、滅は成るを以つて優らしめねばならない。一人死すれば二人生れ、一つ滅すれば二つ成る。失敗あれば成功を以つて取り返す。これぞ天地實在の眞理である。この改變こそ、大にしては世界文明構成の道程であり、地方的には建國の精神であり、小にして連綿たる物自爾生命の根本義と解せらるゝ。萬事の終りは萬事の始まりを意味する。是れを我々目下の境遇生活に判すれば、現在の破滅は戰後に於ける再生轉換を象徵する。

貴家氏は表紙に題して改變といふ。むべなる哉。我々は將來改良せねばならない。改高せねばならない。改強せねばならない。必ず出来ると信じて努力する者には將來の一層なる發展幸福は廻り合ふ。

今や世界は暗濤の中に埋つて清光なきは、やがて東天白み旭日隆々として登るが如く、世界に新文明の創芽する兆なるべし。生の前には必ず變が来る。苦が来る。而して人生は變に處し苦し強く打ち克たねばならない。一歩々と向上せねばならない。生命及び物自爾をして連綿たらしむる神祕の鍵は實に變の中に窺ひ知らるゝ。

表紙改變は我々のポストン生活を描かれてある。我々は努力してより良き下駄、より良き緒を結んで進まう。我々の經濟生活、文化生活は根底より覆つて仕舞つた。鉄柵の中に轉住させられてより三年に迫からんとす。然れ共永遠の覆滅ではない。我々の身の上に落ちて来た物は慘酷なる運命であるが、決して死の國が近づいたのではない。我々の運命を悲觀し切るものは、唯一片の迷ひに誑かされて居るのである。頭を返して見れば地球は晝から夜へと廻轉し、一つ一つの個體は且つ生じ且つ滅するが、太陽自らは不斷に燃えて永却の正午を照らして居る。生きやうとする意志のある處には必ず生存があり、生存の方式は無窮の現在で、自然は悲しむことを爲ないが如く、我々は束の間の夢にも比すべき事に決して悲嘆等してはならない。

私未だ少年時代の時、歐洲を廻つた人の話の中に所は忘れたが「古代の石棺に死人を悼む者に示す爲にか、隆々たる生存人の繪が刻んであるのを見た。」と

いふ事を聞いた事がある。皇帝萬歳の言葉があるのは無窮の榮光を意味するものである。物も亦然りである。改變は言葉を換へれば交替であり、亦新陳代謝である。我々は断じて焼けぶとりを信ぜねばならない。

人神に非ざる限り大なり小なり失敗を繰り返す。一ヶ月の中にも一日の生活の中にもある。まして一生に於ておや。併し生を以つて死に勝たしむるが如く、失敗を善用して取り返さねばならない。それが成功の絲口である。七轉八起といふ諺があるが、實に八轉び九起きする處に技倆は鍊磨され發達する。亦生活の趣味もそこにあらねばならない。失敗して其のまゝになるのがつまり世の敗残者である。自然に克つには自然に従ふ事を知らざる者である。

今や冬、木の葉のちり／＼と散り行くのは、やがて来るべき新緑を意味するといふ眞理を體得し、確信し、靜かに將來の望みを目指して居らねばならない。我々の前途は多難である。是に打ち克つ道は必ず成るといふ信念を懷いて、志に向つて努力するのみであると私は思ふ。新陳代謝の實を擧げねばならぬ。

我々のキャンプは沙漠の中で廻りは荊棘とワイヤ垣で圍はれて居る。荊棘とワイヤ垣は寂定裏の形骸にすぎぬ。凡ての抱泥、俗塵は地面へ吐けばよい。肅々と動く吾人の血潮は頭を上げて大空を見よと命ずる。そこには無限の天があるのみ、一塵の眼を遮ぎるものもない。時々悠然たる白雲の沙漠に聳ゆる鉛色の嶺頭に閑不微と横つて居るのが面白い。神は時勢といふものを用ひて、人心を衝動する事をするが、いっしか其の衝動は白雲のかたに消え去る。

噫！ 何と偉大悠久なる宇宙の大精神よ。

(正月十六日夜)



家庭と児童

有田 百

北加モントレー郡のロバツク老判事が、或裁判の時筆者に物語つた事がある。米國の社會現象で最も憂ふべき者はアレだ。と言つて窓外を指すので其方を覗くと、オート・カテゴリーが二十許り並んでゐて、今しもツレラーを着けて簡單な家内道具を積み三四名宛の子どもを乗せた三臺の自動車があつた。子供達は車に疲れたのであらう。早や庭に蜘蛛の子を散らした様に飛び廻つてゐるのである。老判事は語を續けた。

「家族をツレラーで引率して轉々として働き廻り、子供はオート・カテゴリーに又は農園の一部に無監督のままに放任してゐる。之が夏季休暇中の一二ヶ月の期間であるならば兎も角、現在の狀勢は斯うした生活が流行してゐる。經濟關係から起つた事であらうが、何れにしても多くは家を持たぬ生活、寧ろ無責任な放浪生活をしてゐると言つた方が適切であらう。家庭の無い生活をする児童の將來が犯罪の温床であるのだ。是は要するにスポート・ホームを持たぬ市民の増加が我が社會の禍根であるのだ。」

と言つた老判事の言葉が、そのまゝ我等がセンター生活の半面を指摘したかの感があつて暗い思ひがする。

公立學校の生徒が授業開始のベルが鳴つても仲々教室に這入らぬ。教師に反抗して悪口を言ふ。拗る、騒ぐ、勉強は形式であつて、教師の目を盗んで繪を書く者がある。探偵小説を読む者、丸で教師の注意の如きは馬耳東風であると云ふ。無論此は少數の生徒に過ぎないであらうが、何れにしても「日本人の學童はこんなに悪いとは思はなかつた。」嘆聲を洩した先生があつた。我等は他山の石として看過出来ない教師の述懐である。

思ふに、戦前は整つた社會に任み、整然たる學校に學び、恩愛溢るゝ家庭の内に生活した。然るに戦争と云ふ大事件に逢着して、社會人全體が總ての平衡を失つた。且つ同胞は一蓮托生、強制立退令に會し、遂に茫漠たる沙漠の中に抛込まれた。或者は悲觀論を唱へ又は偏狹な愛國論を高調した。一家の羅針盤である両親が捨鉢的言動をしたのであるから、子供獨り素直であるべき筈がない。自暴的となつて「どうでもなれ」と云ふ氣持となつたのであらう。之は獨り同胞子弟のみでない。戦時の副産物として児童犯罪が平時の數倍となる事に依つても如何に道徳が荒廢するかゾ明である。況や前記の如き特殊の痛ましい境遇となつた結果は、遂に今日の如き憂ふべき状態となつたのであらう。一家團聚の愛情に満ちた家庭生活が、戦争より受けた思想と立退令後種々なる問題

に直面し遂にその美風が破壊された。思想的に氣隨氣儘な利己主義へと追ひ込んだ。其處に色々な意味に於て両親を見下し、年長者に對する尊敬の念が薄らぎ、教師に對して謝恩の感念が消滅したのであらう。馬觸れば馬を切り、人觸れば人を切るの殺伐の氣象と化したのであらう。

果して然らば如何にして彼等の思想及び行動を匡正し善導すべき乎、と云ふ問題である。第一に氣のつく事は、枯れ果てんとしてゐる彼等の思想に温情を滅ぎ、人間味豊かな、そして遠大な將來の希望に燃える輝しい其日を過させる事である。

家庭は道德的生活の温床である。家庭を持たぬ子供と言つてよい程の境遇にある此キャンブ生活は、先づメス・ホールに注意すべきであらう。メス・ホールは實に社交的に又家庭的に最大な慰安所でなければならぬ。ホール内部の裝飾も四季折々に趣向を凝すだけの親切と教育的の注意とエトリがあつて欲しい。それと同時に各家庭受持の卓には季節の青物や色とり／＼の花を置きて、先づ新鮮の氣分に心を慰め、子弟の情操を温和に導く必要があらう。而して其日の愉快な出来事なり勞苦を靜かに物語りながら、一家談笑の裡に食事を執るならば、多少なりとも荒み行く子供の心を引度す事が出来はすまいか。家庭と云ふ温き氣分を與え、戦前の麗しき家族生活を幾分でも意識の中に蘇らせる事が出来たなら、子弟の思想も行動も立直しが出来はしないだらうか。

要は家庭的的人生享樂の第一は食事時間にある事を重要視すべきであらう。



化石に關して

新聞惣太郎

化石蒐集の歴史

は今の處、別に纏つた書物はないやうです。只フランスのセント・レオンのネオンダータルと云ふ原始人貝はジラジイック約一億五千萬年以前のものでありまして、其當時既に化石となつて居つたものを集めたものであり、すが、集めた本人も亦今日化石となつて掘出されると云ふ事は面白い因縁であります。ネオンダータル人の化石の最初に發掘された場所は、ドイツのネアンダー平原でありました爲に其名となつたのであります。時は「進化論」の鼻祖ダーウニンが「種の起原」を發表した一年前、千八百五十八年前既に此發掘された原始人に就て發表されて居つたのであります。

其後ベルギーからフランス、スペイン、又イタリー北部からクロチヤ、アジアルコからパリスタイン地方に隨分澤山の此人種の化石を掘出まして、其数は百に餘るのでありますが、中に完全なものが澤山あつて老幼男女、凡てのものがあります。又其使用した石器と思はしき遺物はアラビヤからペルシヤ、北アフリカ地方又、遠く支那迄も及んで居ります。併し此種族の特長とする点は、

骨格に於て全然現代人と異つて、寧ろ

類人猿

に近いもので其前頭額は平で、眉骨は著しく高く、鼻は中廣くして短平、只頭の後方に於て稍人間としての大きさを持つ腦を保つに足る空虚があつたのであります。大腿骨も彎曲であつて従つて脊椎も近代人とは異つて居つた。足と手とは身體の割に大きく、殊に足の親指は著しく發達して居つたのであります。斯う云ふ處から想像して其性質は他の野獸に等しく、獷猛で恐ろしく狂暴であつた事と思ふ。類は勿論野卑其ものであつたに違ひない。併し此種族の住んで居つた場所に爐と炊火した跡が明かである處から見れば、當時既に火の用ゐる方を知つて居つたやうであります。又其器物としては弓矢の發明こそなかつたが、御粗末ながら石器も作つて居つた。槍の穂先や手斧等の遺物は相當に残つて居ります。更に驚くべき事は此人種にして人間の永遠性を知つて居つたと云ふ事であります。夫れは彼等の墓地とも思ほしき古墳の中に、色々の食料や塗料、又は石器等を死人と共に葬つた跡が残つて居るのであります。斯様な事から推察して多分相當の儀式も行はれて居つた事は疑ふ余地がないのであります。此蒙昧なる原如人の腦裏にも尚靈魂不滅の觀念があつたと云ふ事は、完全なる人間としての素質を持つて居つたと云ふて差支ないのであります。故に化石蒐集の第一人者は此ネアンダータル人であつて、今から實に十萬年以前の事であります。

ギリシヤ文献

に依れば、クリスチヤン時代の余程以前に、化石の研究は本格的にやつて居つた事が明白であります。水成岩の内にあつた有機物の遺物に關して、當時の人の中に注意深く研究紹介された事は面白い事であります。

例へばヘロドタスの如き有名な人は、紀元前四百五十年にアフリカ旅行中エジプトよりビアの沙漠から貝類の化石を集めて之を研究した結果、太古の地中海は現在よりも遙かに廣がつて居つたものであると述べて居ります。又エジプトのピラミッドの築造に使用されて居る石の中に化幣石と云ふ貝類の化石があります。此貝類は太古テゼアン海に住んで居つたデスク型に集團生活をして居つた貝類の化石でありまして、此テゼアン海とは今の地中海からアラビヤ・ペルシヤ・アフガニスタンからチベツト・支那中西部全體から海南島に抜けた海であります。世界の屋根と稱へらるゝチベツトも昔は一度海底であつたと云ふ事は、地質學者の一致する處であります。さうして見ると、此ヘロドタスの學説は二千五百年後の今日立派に証明されて居ると云ふ事になります。其他當時の大思想家と呼ぶるゝアリストートルの如き人が、化石は岩石の中に生物の卵や種が芽生へて成長したものである等と不思議な神秘説を把持して居つた様であります。こんな

蒙昧な思想

が、どうして七賢人の一人と云はれた彼に考へ出されたかは知りませんが、彼の弟子の一人であるテオパラスタスが明白に其事を申して居るのであります。中世紀の暗黒時代の初頃は化石と云ふものに關して只、或有機物の残骸位にししか考へて居らなかつたのであります。と云ふのは教會の信條として、「六日間の天地創造説」を強いて居つたやうな有様でありますから、此説に従へば宇宙は僅々数千年の年齢しか経つてない事になるのであります。例へば大監督ウツシヤーは熱心にヘブル語の聖書を研究した結果、「天地の創造は紀元前四千。四年十月廿六日午前九時であつたと、千六百五十四年に明白に

聲明しました。残念な事には此大監督ウツシアアの定めた年代を、後年不明の人々に依つて聖書の權威ある解釋として、教會正統派と稱する多くの人々に採用された事であります。此信仰は消滅した凡ての生物や海陸の移動と云ふやうなものはありません、思はしめたのであります。其結果此時代に於ける化石に關する趣味ある僅かの文獻は抹殺されたのであります。併し文藝復興期に入つて、漸く科學研究の勃興すると同時に化石に對する注目も、有機體進化の論争に力ある道具として向ふべく研究され出したのであります。

化石の論争

を眞面目に仕出したのは大凡紀元千五百年頃、伊太利に於ける運河工事中、新生代の昔海底であつた地層の中に、澤山の介殼の化石

がまるで現在海濱で見受けるやうに掘出された事から人々の注目を引いたのであります。當時エンヂニヤの見習としてアーテストであつた、レオナード・ダ・ヴィンチと云ふ青年が傍に居つて、此化石に關して非常に興味を持ち、之等のものは必ず皆海中の動物であつて、曾ては此地方も海であつた事を証明するものであると申しました。併し此説は一般から一言の下に否定されました、約二世紀の間析角の有機物權護者の論も色々の迫害を受けた後破れたのであります。其内最も獨斷的な見解は化石の生物學の見解を否定する事であつた。或者は岩の中に出来た「不思議な造化」であると思ひ、又或者は「眞の信仰から人類を欺く爲に作つた惡魔の生物模造」であると致しました。之等の中最も著しい熱狂者の標準は、千六百九十六年獨逸のゴザの近傍で掘出された、マムモスの化石即ち象の化石であつた。プレシトシンの地層から掘出した物でありましたが、當時

ゴザの學校で体操教師をして居つたアーネコト・テンゼルと云ふ人が買取る事になりました。之は前生代の怪物の骨であるとして一般に發表しました。處が之に敵愾心を持つ一般會衆は騒ぎ出して、責任ある醫學校當局の嚴重なる調査を求むると訴へ出で、而して其結果を發表すべく要求したのであります。處が其結果當時化石に對する研究や生物學に對する研究が幼稚であつた爲に、陪審官の判決は「自然界の惡戯」即ち畸形物であると断定したのは滑稽でありました。

斯くする内に敬虔なるクリスチャン一味も、化石は曾て有機物であつた事を疑はなくなつた。例へばイブルの内に之に關する確証はないにしろ、一般新思想の湧くに從つて、凡ての化石は「ノア」の洪水に依つて亡ぼされたものゝ遺物であると云ふ風に解した。此思想の根元は、七百六十六年ホアン・スチユザーに依つて出版された「HOMO DILUVI TESTIS」と云ふ書物に依つて感化されたものであります。

さうして其中にスワツランドのオーニンゲンにある近世代中葉の地層で曾て湖の底であつた處から掘出した、脊椎關節に頸蓋骨の付いた化石を描畫として入れ「之はノアの洪水に依つて亡ぼされたものゝ遺物」であると申して居りました。其後有名な考古學者クエバー氏がもう一度好く其化石を研べた結果、之は正しく「山椒魚」の頭の化石であると断定しました。そして之を

「ANDRIAS SCHEUEHNERI」と改名いたしました。斯うした

化石界の滑稽

は只にヨーロッパ斗りではありません。當北米に於ても屢々、つたのであります。然も知識階級の間には見受けられたのであります。千七百。六年七月十日の日附で書かれた、ニューヨーク州知事ダッドレ

一氏の手紙に、其當時新たにニューヨーク州に發掘されました化石に關し、自分自身としては勿論の事全ニューヨーク中の市民初め醫師達も實見せし事ながら、之正しく人間の齒の化石に毛頭の疑も無之候、乍併其齒の偉大さは實に驚く斗りにて高さ六吋に欠く只一分、周圍の寸法十三吋、而して目方は二斤と四オンスも有之候、自分もかゝる齒は正しく人類以外のものとは考へられず候へ共、若し是れ人間のものなりとせば實に驚くべき巨人にして、恐らく其人の頭は雲の上迄も抜け出で、世界に於ける凡ての生物皆恐れをのゝく中を怒々と闊歩せし事ならんと存じ候、若し又之を葬るに於ては何を以てせんか只ノアの洪水の外無之きものと存じ候」と書いてあります。之實に創世記第六章の記事に獨占され、其中にあるネピリム(巨人)の遺骸と誤認せしものと考へられます。此マストドンの齒(象の種類)に關して書かれた事共は、今日から見れば殆んど信じられないやうな話でありますけれども、實際當時は嚴肅にして敬虔なる人々の間の話であつて、決して虚談や滑稽半分の世間話ではなかつたのであります。

次は悲劇

もう一つ十九世紀迄は如何に化石に關して、一般知識の不完全でありつたかと云ふ悲劇の例証を申し上げて見ませう。之も獨逸のホイッバッグと云ふ處にあつた話ですが、ヨハネス・ベリンダヤと云ふ彼地の學校教師がありました。此人は仲々の熱心な化石蒐集家で寧ろ狂信家とも云ふべき人でありました。従つて何時も學生を連れては附近の山崩れ掛けた地層に化石のある中を探し廻つて歩いたのであります。處が其學生の中に一人の悪戯の好きな者が居りまして、小石に動物の形を彫んで教師の行く場所に秘かに投げて置いたので

あります。勿論次の採集に出掛けたベリンデアは之を見附けて大いに喜び、大切に之を蔵^{シヤ}ひ且つ自慢にして居ったのであります。さうした悪戯が長い間續けられ然も色々の虫の姿、花の形、蛙から天の星に至るまで造られてありました。

最後に之等の化石を中心として、*ELITHOGRAPHICA MUSEUMS* と云ふ本に編みて千七百二十六年に出版いたしました。處が其後間もなく著者なるベリンデヤはベブル語で自分の名を化石と思つた小石の中に見出したのであります。斯様になつて参りますと眞面目^{キマジメ}な學者肌のベリンデヤも困つた事になったのです。一度ならず幾度も幾度も繰返し、こんな悪戯をされ、最後に自分の名に依つて本に逆書いて出版した事の余りに輕卒であつた事を悔いて、其出版物を賣つた値段よりも遙かに高値にて買戻し遂に破産して終つた。自分自身も其苦痛の爲に悶死して終つたと云ふ事實の悲劇があるのであります。

十九世紀はかくして此處彼處に化石に関する注目を引いた爲に、其趣味も一般化され教會の内外を問はず、世界到る所に蒐集研究され其結果、今日では誰も古生物學に對して疑問を抱くものになつた。殊にローマのパチカンに於ける法皇廳は、十九世紀に於ける最も大がかりな化石採集を營みまして、今は世界に有数の標本の持主であります。

二十世紀に入つては交通及び通信の急速なる發達の結果、尚一層其度を増し其爲化石に對する學術上の進歩も一段と輝いて來たのであります。

進化論

に於きましても、現在世界に生き残つて居る動植物のみにて論ずるならば幾年かゝつても論争の果しがない。只單に議論に過ぎないの

でありますけれども、一度目を化石界に轉じて、消滅した過去の動物や植物を現在のものと比較對照して進化の道程を極むるなれば、誰しも疑ふ餘地のないのであります。又地質學上、大陸の移動と云ふ事も然りで年々歳々大艦巨砲主義の米國に取つて、現在ではパナマ運河も誠に不自由なものになつたであらう。併しあのパナマ地狭も過去に於ては既に數回に亘つて海の底に沈んだり、浮んだりした事實があるのであります。もう一億萬年も経てば五萬噸は愚か十萬噸の船でも平氣で航行し得るやうにならぬとは誰が云ひませう。

故國日本

に於きましても、太古は海中に在つたもので漸く石炭時代に浮いたばかりの地質學的年代から申しますと至つて若年であります。

其点當アリゾナ州の化石よりも新しいのであります。其後カムチャツカより千島、北海道本土、九州から朝鮮に續いたアジア大陸の一部として、顯はれたのであります。白堊紀に至りまして再び海底に沈み、其後第四紀の初め新たに樺太から北海道及本州四國九州が朝鮮に又々續いて大陸の一部として表顯したものであります。其際今の日本海は大湖水として出来、其後幾多の変遷の後現在のやうな嶋帝國として出来上つたものであります。又印度もジュラジツの中葉アフリカのマダカスカル嶋に續いて居つた大陸で、其間の印度洋はゴンドリナランドと云ふ、今は失はれたる大陸であつたのであります。以上の事實は只動植物の分布や古生物の化石研究に依つてのみ肯定さるゝものであります。終りに此稿を開るに當り、友人諸氏の御援助と化石研究の先輩沖戸氏に深く

感謝するものであります。

(完)

自由律俳句

出征の家

大月喜三郎

ここにも出征の家が冬日の窓に金の星

君、イタリヤに片足おいてきて故國の土を踏む

いよいよ戦争が激しくなつた夜ごと満天の星

星がみんなわくわくしてゐてけふの戦況ニュース

兵を送り兵を送りて元旦のとしより子供

自由律俳句

白いエプロン

河口幹逸

一式が終ると白いエプロンの娘さんで紅の唇

紙ナプキンは桃色のビールが注がれワインが注がれ

何か唄え唄えと云ふ、もう酔ふてゐられる

何んにも唄えないで人の唄ふの見てゐる私で

宴會を出ると星、星の名はみんな忘れてゐる



松の實を噛みながら

青木伸

ひとり ストープの前に蹲まり
心うつろに松の實を噛んでゐると
小さな粒が放つ清楚な匂ひに
古い記憶のフィルムが浮んで来る。

釣瓶落しの冬の夕陽を背に
放課後の寸時を惜しみながら
裏山に駆け登つて薪を切つて来ては
祖母を悦ばした小學校時代……
カサ／＼と松かさにはむせび
さむ／＼と湖水の面を傳ひ来し晚鐘よ……

「死んでも草葉の蔭から お前の成功を祈つてゐるぞ」
こんな平凡な言葉も旅で思ひ出せば
沁々懐しく・涙ぐましくなつて来る。

(古い詩のノートより)



ふろしき

大月喜三郎

クリスマス前のことである。妻とキャンテンへ買物に行つた。贈物にするつもりで、品物を一通りあれかこれかと見廻つたが、或る物は安すぎるし或る物は高すぎる。總じてキャンテンの物は品物の割合に代價がよすぎると、妻が言ふので結局外部の、モンキーかシヤース店に注文することにした。ところでその買物に行くに、うんと買ひ込むつもりでもなかつたが、手さげ鞆を一つ持つて行つた。それでまあ、タブレットと數本の鉛筆を買つたので、それを鞆に入れてもどつた。戻つてから私は思つた。これだけの品物を容れるのに、ぎやう／＼しい鞆を用ひなくてもよいではないか。妻のかむつてゐるバンダナで事足りる。即ちふろしきにて充分だ。鞆だと、中味がなくても、矢張り、提げて歩かねばならぬ。薄いものや小さいものは容れ易いが、四角張つたものや、少し大きいものは何としても入りにくい。かりに三弗を奮發した鞆だつて十仙か十五仙の子供の繪本でさへ入れ兼ねる。ところが風呂敷になると、僅か方二尺か三尺にして、四角でも三角でも、丸いものでも何んでも、さつさと中味の形に應じて包んで行けるばかりでなく、空になつた時には、小さく折疊めばポケットの中にと納まる。寒い日や埃立つ日は、妻の頬かむりにするバンダナの代用にもなる。容れものは一つの形式である。形式は内容に應じて自由自在になり得ること

を理想としなくてはならぬ。形式が硬化し過ぎたため、内容を振ふに不便となつてはならない。だと言つて形式無くしてあらゆるものは存在し得ない。その点、ふろしきの如く、内容に應じて、その使命をまどかに果す形式は、古風なことではあるが、貴いと思ふ。私はこの古風なふろしき・にもつとも新しい精神を生かして行きたく思ふ。人としても、ふろしきの様にこだはるところがないと、ほんとうに自由だ。對手に従つて相を変へるけれども結ぶべきところはちやんと引きしめる。自分の方に一つのぎこちない型を持つてゐて、それには合ふものだけを容れて行かうとする乾の如くでもなく。もと／＼自分の自性は無い、無相の相を相とし、對手に應じて、丸いものには丸い様に、三角には三角なやうに。しかし八方美人と言ふでもなく、ふんわりと包容するが、易々として受け容れもするが、きりりつとして引き締めてゆきたい。

また荻原井泉水先生は、「俳句も風呂敷の如し」と言つてゐられる。その意味を簡単に言へば、俳句の形は四角形とピッタリ相合するのである。その取枚の内容によつて、幾つものものを取枚として取入れ得るが、それを上手に一枚の風呂敷に包んでしまつた如く、ひつたりと引きしめたくくりを持たせる如く、しかも取枚によつて、丸いものは丸く、四角なものは四角らしく、リズムを持つた表現、「形」とならねばならぬ。ちよろど風呂敷に物を包んだ如くに、と。

金剛經に、『應無所住而生其心』と言ふ一節があるが、應ずる所住を無くして而も其の心を生ずべし。とは何と言ふ雄大な心境であらう。若し、ふろしきに言葉があつたならば、わしやその所住なしの心だよ。と言ふであらう。(終)



純真な心

猿渡則子

荒れすさんだ戦時下とは言へ、こゝ轉住所は或一面から見て浮世離れた沙漠に住ひだのに、やうばし此の小さい社會でも余りに込入つて居て、色々の方面に複雑な世相を朝夕見聞するのである。それに引き返へ子供達の世界は何と言つても單純で飾り氣がなく素直である。

先日子供達に「良い事を教へて頂きましたら早速どし／＼ツライなさい。皆さんはさしあたり、感謝の氣持で朝夕御両親に丁寧^{マツマツ}に御挨拶をしませう。又外の小父様小母様にも、おはやうございます、とか、今日^{コンニチ}は、とかニツコリと申してごらんなさい。」と申しました。

それから二三日経つて朝キヤンテンからの歸りがけに、二十七區の向ふの方に行きかけて居た十三歳のサトルさんが後をふりかへつた時、私の姿を見つけたので早速引き返して来て、「先生おはやうございます。」と丁寧におちぎをして行つた。おゝさうで有つたか、私がお話した事を覚えて居て實行してくれたのか、只一人で何とも云ふ事の出来ない嬉しさを感じた。

それでその次の土曜日に、「サトルさんは教へて頂いた事を早速實行しました

よ。サトルさんはグッドボーイと思ひませんか。」と子供達に話した。それからと言ふものは今まで知らん顔して通つて居た子供達がニコ／＼しながら丁寧におぢぎをして行く様になつた。

又此の間二十八區のブラックマネジャーの所に用事が有つて、シヤワールムの側を歩いて居ると、「先生！」と言ふ聲が向ふの方から聞へて来た。どつちか知らんと前後を見廻して居ると、スワミングプールの廣場の方から息切つて走つて来た男の子三人、(ケンゴさん、サダヲさん、ジュンさん)私の側にくるなり、「今日は」と言つた。「あら、あなた方でしたの、ナイスボーイ達ですね。」とほめてやるとニコ／＼して喜んで居た。

あの純真な瞳、血色の良いホノペタ、抱きしめてやり度い程可愛らしかった。用事をすまして家に歸つて来て、もう何となく心が晴やかで感謝の氣持がいっぱいで有つた。しばらくして學校から歸つて来た勵坊が、「あらお母さん、今日はスベツシヤルにハッピーな顔して、どうしたの。」と聞いた。で、其の譯を話してやると、「ナイスボーイ達ですね。」と共に喜んで呉れた。

今まで二十年の間子供達と共に暮して来て、しばらく感謝感激して来た私では有るが、此の間から度々嬉しい事に出會つてなほ更、私の使命は残る半生は純真な子供達のために捧げ度いと考へさせられた。

聖書の中に「汝ら幼子の如くならずば天國に行く事あたはず」と有るが、本當に其の通りとしみ／＼と教へていたがいた。



同胞行進の歌

長藤行精

(一)

啓明^{けいめい} 澄^すめる 清朗^{せいろう}の

雄^お々^々 萬^{ばん}象^{しやう}醒^さめて 血^ちは躍^{おど}る
瑞^{ずい}氣^き天^{てん}地^ちに 健^{けん}けは

(し返折)

起^たて 同胞^{どうぼう}の 丈夫^{ますら}等^らよ
希望^{きぼう}の 岸^{きし}に 榮^は華^えはあれ

(二)

見^みよ 旭^{きよく}日^{じつ}の 勇^{いさ}ましき

燦^{さん}たる 光^{ひかり} 潑^{はつ}刺^{ろう}と
匈^{けふ}ふ 紅^{こう}線^{せん} 身^みに浴^あびて
我^{われ}は 進^{すす}まん 新^{しん}世^{せい}紀^き

(三)

東^{とう}亞^あに 崇^{たか}く 聳^{そび}え 立^たつ

(四)

春^{はる}風^{かせ} 互^わる 丘^{おか}の 上^{うへ}

芙蓉^{ふよう}の 峰^{みね}の 白^{しろ}銀^{ぎん}は
無^む漏^{ろう}の 慧^{かい}燈^{とう}と 輝^{かが}きて
吾^{われ}等^らが 前^{ぜん}途^とを 照^てすなり

(五)

流^る轉^{てん}の 旅^{たび}は 今^{いま}暫^{しば}し

定^{さだ}めなき 世^よに 正^{さだ}理^めあり
拓^{ひら}く 我^{われ}等^らの 美^は園^{ぞの}の
精^{せい}華^{くわ}は 悠^{いう}久^{きう} 咲^さき薫^{かほ}る

(六)

八^{はつ}紘^{くわう}一^{いつ}宇^う 家^{いへ}となし

堅^{けん}忍^{にん}自^じ彊^{きやう} 意^い志^し強^{つよ}し
天^{てん}賦^ふの 使^し命^{めい} 果^はたすは
我^{われ}が 民^{みん}族^{ぞく}の 誇^{ほこ}りなり。

(一九四五年正月二日)

ポストンを憶ふ

中村正敏

いざ出發となると心忒かれて名残りが盡きず、あれもこれと思ふばかりで何んにも纏らず、出發の時間は迫る。遽しい中に車は走り出してしまふ。着いた當座は周圍の物珍らしさに注意は只新住地の一点に集中、他を忘れて居るが、ものゝ一月も経つと過ぎ来し方が慄び出されて来る。わけて懐しい憶ひ出は印象新なポストンである。

松原氏は十一月事件以来の知己、有田氏は同じブラツクに住ひした所謂隣人。「長い病院生活で退屈であらう。徒然に何か書いて見たら氣も散じると云ふものだ。」と慰めすゝめられて、毎日病院の窓から覗くせまい天地の單調に飽き果てた頃ではあったし、親切に甘へて筆ずさみしたのがポストン文藝誌との縁

の初まり、今では忘れられぬ羈絆となつた。同人寄稿家には未見の人も多くあるが、お名前だけは忘れ得ぬポストンと共に永久に思出の種子となるであらう。

ポストンと比良の間は二百哩内外、往復は頻繁で敢て紹介する程の珍らしさもないが、大抵は汽車便であらうから自動車便の概畧を。

朝の七時にポストンを出ると午前十一時にはアリゾナ州の首府人口拾萬のフイニツクス市に着く。パーカーに出て一路東に東にと沙漠を走る。眼につくものは皆さん御承知の石原とセージブラツシばかり、單調は已に三年近くの実験ずみで馴れたものだ。それでも二年有半ぶりに鉄柵を逃れた氣持と云つたら何に譬へやうもないほど爽快であつた。去ふだけ野暮ではあるが、自由のない人生、くゝられた生活、何んとも憂鬱なものであらう。などと思ひ耽りつゝ何んの変化もないが四方の景色

に瞳の休まる暇はなかりた。四十哩あまりでロスアンゼルス、フィニックス間のハヰウエイに出る。此處からミシンの往復が忙しくなる。中でも羅府行きのステージは何れも満員で二十分間毎位にやつて来る。急ぐ程なくだんだん沙漠が沃野に變つて来る。グレンデールに着く。此所は亞州に於ける同胞の根據地。十年前、三回曾遊の地末だ記憶に残るもありて今昔の感に打たる。之からフィニックスは町つゞき、其所で晝食をとり暫し市街の様子を眺めて見る。ガスリンのレーションが何處にあるかと思はれる程、ガスステーションの繁忙さ。自動車の多さ、街行く人の景氣のよさ、戦争が何處にあるかと思はれる程の世は太平さである。こゝから十四五哩街道を東に進めば亞州では三四番目のシティーであらうメサ市に着く。此處に大きなモルモン寺がある。市の入口から南に折れるツース

ン道路をとつてチヤンドラの町を過ぎれば、間もなく前方の山麓に丹頂白壁の美觀が眼に映ずる。之がヒラのセンターである。ドライヴァー氏が指し示す。其少し手前で車は急に右に折れる。衝き當つた所が第二ユニットでアドミニストレーションの所在地。中に小山があり、バラツクを覆ふカットン樹は黄葉して砂のグラウンドに屋根は赤色の本物を用ひ、壁は白くプラスチックで小山から眺むる全景はよく調和がとれてなか／＼に美的である。メサから此處まで三十哩余り、其間沃野千里と云ひつべく耕地多く、来る一月には出荷するレタースの生育最中である。別れて見ればポストンも宜い所だ。其筈だ。あの人跡とても稀な蠻地の開拓者の自分も一人で、其處には多くの同じ釜の飯をつゝいた同胞が住んでゐる。追憶は實に無限である。と云つて其思出が百パーセント美しいものばかり

りではない。間には苦い思出もあるが、
腦の經濟は悪い記憶を忘るゝことに
あるさうだから不快の追憶は忘れて善
い思出に耽つて見たい。十二月葬の松
原氏の「思出」を讀んで知らず／＼熱
いものが込みあげて来た。ページを開
けたまゝしばし余念なき追憶に耽つた。
想は四十二年の霜月半ばに走る。夜毎
の風は寒かつた。悲壯と云はうか、あ
の一週間のあの光景、それを眺めてひ
そかに感激の涙を拭ふたことも幾度か
あつた。エバキユエートされて日は浅
く、未だ心の安定はなく、不安と焦燥
の過渡期ではある。一つ間違へばと云
ふ危険が多分にあつた。斯ふ云ふ場合
の群集心理は怖ろしい。たつた蟻の一
穴から大事は勃發する。少しの怪我人
も一人の違反者も出さず、満足な解決
が出来たあの時の晴れた心に引替へ、
過ぐる旬日の垂れ込めた密雲は随分重
かつた。當時の誰彼の容姿が懐しく眼

に浮ぶ。然し松原氏の言ふ通り一人去
り二人行つた現在のポストンを思ふ時
一味の淋しさが身に迫る。それから
多事であつた。文からもなすべき事が
多々あるであらう。よき指導者を扶け
て協力一致が望ましい。然る一萬余り
のポストン人も、何れは別れ／＼にな
る運命ではあるが、よき印象を残し、
何時までも／＼快い思出に耽りたい
ものである。

時節が来たならばポストンに於ける
二年間の事象を何かの機會に發表した
いと思ふから、こゝでは文以上は控え
るとしてこの稿の終りを急ぐ事にする。
群を重ぬる毎に「ポストン文藝」の内
容外觀の向上が眼に見えて来た。編輯
子の識見手腕と犠牲に敬服する。中で
も瀧井生の原板の巧妙さは驚嘆に値す
る。何時ぞやの編輯後記にもあつたと
思ふが、純文藝誌となると同人雜誌見
た様で、ある局部に制限される恐れが

ある。今の同胞の境遇と場合から考え
ると大衆向としての編纂が出来るなら
ば望ましい。政治、経済、社会と云ふ
風に織り交ぜる事に賛意を表したい。

昨日までのポスト人も今日はヒラ
の住人となる。がまだ旅先の気分で他
人の家に厄介になつて居る様で依然心
はポストンを去らない。此所の自治制
がどんな風に運用され、フランクシヨ
ンがどの程度のものか皆目判らぬはか
りでなく、まだ外面さへも判然とすお
知らせする何物も今はない。何れこの
稿が巷に現れる日は戦時第四年目の初
春頃であらう。萬物生々たる新春を皆
さんと共にお慶びしたい。が世界を覆
ふ戦雲は少しの晴れ間もなく、それを
思ふと目出度いやら目出度くないやら
わからない。わけても愛する我子や夫
を戦地に送つた家族の人達の胸中を察
する時只管武運長久を祈るのみである。

(四四、一六、一八)



日に日に評判が
よくなる
マル 昭

昭和醬油醸造会社
アリゾナ州グレンデール市

SHOWA SHOYU BREWING CO
RT. 2, BOX 51, GLENDALE, ARIZ.

ポス トン生活印象 (五)

貴家未ま子

千九百四十三年の何時頃であつたか、ドクター・パーウエルがポストンの事を書かれたものを讀ませて貰ふ機会を得た。其中の一節にこの地の土のことを BROWN TALCUM POWDER DUST といはれてあつた。眞に斯くの如くでフワ／＼してゐて、物が觸つただけにも舞ひ上る。着物やからだに附き易くて容易に落ちない。風はこの土を捲りあげて吹き、嵐はたゞの嵐でないダスト・ストームである。

部落内に歩道の工事を爲すべく、キ

ラ／＼する炎熱の中に手に手にシャベルを持って出た男子等の顔は、宛ら黄粉のお團子のやうに土まぶれになつてしまつた。歩道の工事が終つて日に何回と通ふ食堂、洗濯場、部落事務所、厠への道筋が大分歩きよくなつて来た。次には大量のデヴィルグラスをパーカの近郊から堀つて来て、バラツクの廻りへそれを植えることになつた。私の部落では婦人等總出で地面へ植えつけたのである。この草は節を持った蔓根が地中に深く蔓延するので、その根絶を爲すは容易でない上に、はびこつた根は非常に強く他の植物の發育を阻害するので、名も「^{デヴィル}悪魔」と附けられたと思ふ。而しこの名稱は俗名であるかも知れないが、一般の人は斯く稱へてゐる。外部では庭園、菜園などへこの草の侵入を恐れて其駆除法に悩むの

に、ポストンでは皆々が擧つてデヴィルグラスを栽培した。忌み嫌はれるデヴィルグラスも此處では大した歡迎を受け、芝草の身に一世の榮譽を擔つたわけだ。これとは反對に静かな沙漠の堀川に棲んでゐた魚は、急にこゝへドヤ／＼と入つて来た人等のなぐさみものになつて釣られた揚句、バケツや空罐の中で一日の壽命も保ち得ないで直ぐ斃れてしまふ。バラツクの廻りのあちこちに魚の死骸が横たはつて悪臭を放つてゐた。これらは重に子供等の仕事ではあつたが。

先づ歩道の工事に伴つて各々の室の表裏の庭にも隣屋との境界が出来た。其處を一時の自今等の所有地と定め、男子等はコロラドの河邊へ行つて、柳とカツトンツリを切つて来て其枝を梅木とし、家の廻りへ澤山に栽培した。

コロラド河畔、パークー近郊などへ行くには一人々々パーミットを貰はなければ行かないのである。

人間の住み場所とすべく為さねばならぬ色々の仕事は、追々と少しづつ運出して行きつゝある此間に、腹痛を起した人等が七日目頃からちらほらと出初めた。二人三人又四人と日に日に殖えるばかりである。丁度六月七日入所して十日目の夜中に、私の室の西隣りから一時に病人の呻く聲、吐いたり下痢したりする音が聞えて来た。これはそれ／＼の一命にも拘はる大事が襲つて来たものではあるまいかとさへ思はれて、何とも云へぬ淋しさや怯ゆる心が湧き起つた。翌朝は又向ひのバラツクに二人出た。其次の朝から私と私の娘が一所に病み出した。午後の室内の百十度の暑さの中で下痢と嘔吐に苦しむ

事二日間、三日目から下痢や嘔吐が遠く
なつて四日目に大分樂になつてホッ
とした。この二三日間が一番病人の多
かつた時で、戸毎に診察して行かなか
ればならぬ醫者は其混雜に間に合はず
醫師の困却も一通りではなかつた。二
人の看病をしてゐてくれた夫は私達が
起きられるやうになつた頃、男の子と
一所に病み出したが私達に較べて非常
に輕くて済んだのである。此期間内は
食堂へ食べに行く人が稀で寂しかつた
との事であつた。私は最初これは悪性
の流行病とも考へたがさうではなかつ
たらしい。其筋では色々調べたといふ
話であつたが、調べた結果の確な原因
は遂にきかなかつた。重なる原因は水
であらうと私は思つた。混合物の多い
馴れない水を即時に多量に飲み其上急
激の炎熱などが食物に作用して、體內

を襲ふに至つたのであらう。この際も
人々はさまざまな事をいひ合つた。こ
こには書くを控えねばならぬやうな事
柄もそれからそれへと数々聞いた。

戦争勃發に因つて人間一代のありと
あらゆる苦難を一氣に掻き集めて背負
はされたかの苦境にある時、各自の心
はおのづから荒み勝ちになるのは自然
の成行きではあるが、斯かる折に假令
小事なりとも何か異變の起きた場合、
沈靜を保つて事件の成行を判断し、正
當の解釋を下す能はざる時は、すさみ
きつた心からは曲り勝ちな数多の想像
や疑ひばかりが蔓延つて、遂に心の安
さを保ち得ないそのことのみでも、決
してよい結果は齎さないのであるとい
ふことを、この際にも私はつくづく考
へさせられたのである。(つづく)

碁漫談

岡本實

碁に関して何か書く様に、と松原君が是迄何度となく命令されましたが、何しろ文章となれば讀者の前へ出るのが恥かしい位下手で、貴重な誌面を穢すことになつてはと遠慮して居たような次第であります。

七歳の春小學校へ入學する前後祖父から初歩を學び、一年後には祖父よりも上手になつたので、其後祖父は決して僕と碁を打たうと言はなかつた。村の子供仲間の先生格になつたのは、小學三年生の頃だつたと記憶してゐます。十二歳で中學へ入學する迄は余り機會もなく、外の遊びの方が忙しかつたらしい。中學で書記をして居た田村氏

漢文の教師の南氏などか伯仲の腕前で、門衛の控室が碁會所であつた。二年の冬暇みに祖父から拾五圓の小遣を貰つて、萩の近くの或温泉へ旅行に行きました。田舎には珍らしい位の立派な宿屋でありましたが、正月前後の事として、殆んどガラ空でありましたので、いゝ室を興へられ、而も、「書生さんは五拾銭デーでいゝです。」と言ふ主人の好意は嬉しかつた。お富さんと言ふ年増の女中さんが、僕を弟かなんどの如く何彼と世話して下され、姉を持たない僕には甘え度い氣持さへ起つた。其女中の紹介で同宿の立派な紳士と碁敵となつたのは碁の大晦日の午後であつた。少し僕の方が下手で二目位の違ひはあつたであらう。が其れからと言ふものは、終日十余時間日記を書く暇もない程多忙を極めたものだつた。然し其内に冬の休暇も終りに近づき、拾五圓の

小遣は費消し盡し、其以上の滞在を許せない日が来た。其れで先生にこの紳士は鹿児島の高等農林学校の教授で農學博士であつたに歸宅する旨を語ると、「君の滞在費は私が負擔してやるから休暇の最後の日迄居て呉れ給へ」と切に勧められ、子供心に辞退する術も知らず、言はるゝ儘に又二日一層猛烈に對局しました。其して先生の牙城を聲す迄に追進した様に記憶する。「君のために實に愉快に滞在したのだから、歸省の際は旅費を全部出さして呉れる様に」との語で、生れて始めてこのへボ碁打も、知つて役立つたことになつた次第であります。

故東郷元帥もへボ碁打の一人で非常に愛好されたらしい。特に晩年は出入の植木屋何某が好敵手として、毎夜の如く元帥邸へ召され、腕前も伯仲であつたらしい。或記者の談ではあるが、

元帥の方が先であつたのか、どうしても勝たねばならぬと力んで居られたとか。日本海々戦の名將もこの道許りはどうも思ふ様に行かなかつたらしい。夏冬の別邸のあつた小田原へ迄も、電報で呼び付けられて居たこの植木屋は幸福者であつた。萬金の賤寶を積むとも、筆を採られなかつた元帥に、幾百となく書かせたと言はれる植木屋碁は仲々の敏腕家であり、今尚其等の掛物を家寶として、金銭にも替へずに居ると聞かされて居ます。

このポストンに一昨年参りまして以來、一年あまり初歩の人達を始め多數の愛好者へ連續講義をして参りましたが、他日其等の碁友と何處で再會するか、其して其時の腕の進境の程が……などと無限の楽しみを……私はそれが嬉しい。

(終)

民謡

雲

鳥

外一篇

モンタナ 福田さかえ

(1)

降るは小鳥かそれとも雲か

冬の山奥灰色の空よ

雪鳥が白い腹見せりや

動き出します次から次と

降誕祭樹が幾貨車も。

(2)

雪はまだらの鉄道線路

山の奥まで訪ねる春よ

柳小枝が紅色見せりや

雪鳥もチン／＼啼いて

遠い寒國へ旅仕度。

小春日和

雪のかんむり緑の松に

風がそよつきや小枝がゆれる

雪の地面にや啼く群れ小鳥

お日は照る／＼インデアンサンマー

空は蒼空日本晴れた

干した洗濯もんなひう／＼乾く

猫と仔犬は日向ぼこ。

童謡 ペンタ屋さん 土田箕人

白のオーバホールに

キヤツプきて

高い梯子の

上にたち

一刷毛二刷毛

塗ってゆく

ペンタ屋さんは

面白そ

天井アイボリ

壁アドベ

深には青の

線引いて

一刷毛二刷毛

塗ってゆく

ペンタ屋さんは

面白そ

茲は僕等の

學校よ

早く仕上げて

あげませうと

一刷毛二刷毛

塗ってゆく

ペンタ屋さんは

面白そ。



羽根政春

謠曲に就て書けと要求された。事實
ポストン文藝が會員百五十を有する
ポストン謠曲界の事を書かずに置く謂
れがない。唯此の雜誌の性質として謠
曲界の事よりも、謠曲そのものに就て
の文章を求められたのだと諒解するが
多士済々の謠曲界で、習い始めて一年
にもならぬ私が諸先輩を差し置いて謠
曲を語る程の凄いい心臓を持つてゐない。
又持った所で何も知らぬ者に何も書け
る筈がない。謠曲は十年間みっちり習
つて十年間みっちり教えて漸く解ると
言へる、と聞いてゐるが、以て私の資

格の程も知れやうし、又以て松原編輯
子をして謠曲に就て書いて呉れる者が
ないと零さしめる所以でもある。私は
唯私の浅い経験と智識で漫談みたいな
氣持で、語れる所だけを書き連ねて、
何れ先輩に専門的の事を書いて頂く誘
導の役をつとめたいと思ふ。

大池先生の話だけれど、羅府に於て
趣味の會で四十年も永續したのは謠曲
界だけださうだ。其の代り盛會だと言
はれた時代もなかった。杉野先生の言
葉に依ると謠曲ほど遊び趣味はなく、
遊び趣味であるが故に中々人が飛び附
かない。併し一旦味はえば中々捨てら
れない。謠曲の聲を聞くと大概の人は
逃げ出してゐる。今盛にやうてゐる人
でも最初は例外なしに嫌だつたのだが
何かの機縁でこれを初めると、今度は

自發的に止す人の方が例外になつて来る。何故もつと早く初めなかつたらう。と皆が皆悔むけれども、もつと早かつた頃は謡曲など大嫌ひだつた人達ばかりだ。

或る月の明るい晩に、病院裏の空地を渡つて来る大池先生の謡ふ朗々たる「經政」の一節を、遙かに聞き惚れた氣持は今以て忘れ得ない快感であるけれども、夫れを味ひ得たのは、一先輩が無理矢理に私を觀世會に入會せしめたずつと後の事である。だから「經政」の一節をカヨテの遠鳴きと一緒にする人達が何人居ても決して不思議ではないのだ。

謡曲は現在甚だ隆盛である。特に收容所内で隆盛であるやうだが、開戦以來、新しい流行歌が絶対に聞かれなくなつた事も原因してゐるであらう。大

戰勃發の興奮で、打ちこわされた日本流行歌其の他の聲樂のレコードはどれ丈あつたか解らない。各蓄音機レコード會社があれ程競争で出して居た毎月のレコードがバツタリ来なくなつたので、聲樂に興味を持つ者は勢ひ其の嗜好と機縁に隨つて、レコードに依らなくて習得出来る詩吟とか琵琶とか長唄とか又謡曲とかに、心の營養を求めらうになつて来たのであらう。それから本飢饉も一因をなしてゐるであらう。謡曲は能の所作に合せて唱ふ唱歌問答である。場所があつて、人物が出てそれが何をした。と言ふ筋があるので一種のドラマである。謡曲本の多くが足利時代に原作され現代に及んで居るので、永い時代の節にかゝつた一種特別の光彩を近古史上に放つドラマであ

つて、文學的に價值高い事言を待たない。文章のみにても捨てがたき趣を持つものである。又收容所は生活が保証され、時間があるのとコミニテイが接近して居て、習ふにも稽古にも甚だ便利である事も原因して居る。謡曲は元來特種の階級の専屬と言つていゝ程の能藝趣味に属したものであつたのは、夫れが難解なうと習得に時日が要るからであつたゞらう。我々は此の点までは甚だ恵まれて居ると言つてよいだらう。

謡曲には五流派あると言ふ。觀世、

金春、實生、金剛、喜多である。謡曲

は能の所作に合せて唱ふ唱歌問答であると言つたが、其の能は古代猿樂の能と言つて、足利時代に各地の神社に奉仕して専門に業とする者があつて、其の土地々々によりおのづからそれ／＼

流儀をなして居た。大和に圓満井、結崎、外山、坂戸の四座があつて、これが他地方の諸座に打ち勝つてこれを大成し今日に傳へたと言ふ。結崎が今日の觀世となり、圓満井が金春となり、外山が實生、坂戸が金剛となつたが、後喜多七太夫と言ふ才物が現れ、豊太閣に寵を受け、後一家を成して喜多流と呼ばれ、これで能の流儀が五つになつた。斯く分れて見れば各々自己の流儀を特別ならしめんとして、それ／＼新意匠を凝らして作り改め、随つて謡の文句も少しづつ或は削り或は加へ五流派別々のものになつて來たと言ふ。

此處ポストンでは今の處觀世と喜多の二流が行はれ、大池氏のポストン觀世會及び第二館府觀世會、杉野氏のポストン喜多會、松本氏の喜多和風會、

徳富氏の第三館府喜多會の五結社を成して各々技を磨き、四季一回づゝ聯合で謡曲大會を催して居る。

趣味としての謡曲の長所は一人でも又何十人でもこれを樂しめると言ふ所にある。技が進めば幽閑なる一室に獨り端座して、靜かに謡曲をやる氣持が言ひ盡せない快い心境である。朗々とやつてよし、寂々とやつてよし、幽々とやつてよし、呐々とやつてまたよしである。強弱動靜緩急の氣分を謡ひ分けて、獨り三昧の仙境に遊ぶ樂しみは言語に絶すると言ふ事である。又多人数では素謡をやる。仕手、脇、ツレ、子方、地謡等、それ／＼役を定めて各各其の氣分を出して謡ふ樂しみが、謡ふ者にとつては中々捨て難いのである。保健の目的が動機となつて謡曲を初

めた者もあると言ふ。姿勢とお行儀の八釜しい謡曲で其の効果が無いとは言へまいが、要するに人格の養成が謡曲の窮極の目標であると言ふ。心邪陰な者は邪陰に謡ひ、清淨なる人は清淨に謡ひ、真面目な者は真面目に謡ふ。聲調の美醜や聲量の多寡では技の上の上手下手は言へるにしても、謡曲の真隨から言へば枝葉の事柄であると信ずる。邪陰ならざる清淨にして真面目なる謡曲こそ眞の謡曲だらうからである。

ポストン百五十の謡曲人は皆此の殊勝なる心掛で稽古をして居るのである。だからカヨテの連れ吠えと我が謡曲を呼び、猛稽古を安眠防害のデイスターバンスだと憤慨する館府の人達よ、我等の此のいちらしい心掛に免じて深くはとがめ給ふなかれ。(終)

吟詩漫筆

(四)

大岡周洋

香奩體

詩吟と云へば劍戟相摩す八千の師鞭
聲轟々夜過河あり、さては本能寺、後
本能寺、下筑後川記、白虎隊の詠詩は
悲憤慷慨人をして躍動せしむ。焦心煩
囑良家赦と、彼の熱血兒雲井龍雄が捨
てた親の立場に同情して作つた棄兒行
は、恰も霜夜の胡茄の如く聽者をして
断腸の思ひあらしむ。又宮詞香奩體と
云つて美人の事を叙した艶麗な詩あり。
宮板の瑣事を述べて諷詠に資するもの、
その源自ら達し。六朝の庾信除陵に至
つて香艷、清新、婉媚是れ貴ぶ。是に
於てか宮體の目あり、當時の宮廷に傳
唱せられたるものにして、その詩境は
獨り宮廷間に専らなるものにあらず。

倉浪詩話に、香奩體韓偓之詩皆裾裾
脂粉之語有香奩集と香奩（香箱、鏡匣と
も云ふ）宮詞は詞家の大香奩なり。唐
代王昌齡を目して香奩の祖なりと云ふ。

閨怨

王昌齡

閨中少婦不知愁、春日凝粧上翠樓。
忽見陌頭楊柳色、悔教夫婿覓封侯。
十七八の美人嫁して即ち離る、猶春愁の
何物たるを知らず、粧を凝らして樓に上る。
夫婦の榮頭を願ふのみ。忽然として陌頭
の柳色を見る。此柳即折て以て別に贈り
し所のもの、功名望遠かに離索の情増に
動く、情動いて悔來り、悔來りて愁生ず。
忽化して淚眼啼眉慵粧蓬髮の一怨婦とな
る。寧ろ甚だ憐むべからずや。

宮怨

司馬攢

柳色參差掩畫樓、曉鶯啼送滿宮愁。
年年花落無人見、空逐春泉出御溝。
曉鶯啼送滿宮愁、即ち長門の愁を抱く者
一人のみならず。花開き花落つ、顔色空し

く人の之を見るなし。誰を適として容を
爲さんや。流水花片を浮べて御溝を出る
も、人は再人間に出るの望なし。後宮多震
にして恩幸及ぶ事なく、此種の恨を抱く者
古今何ぞ服らん。是唐の太宗が宮女を放
出して史傳へて盛徳と爲す所以なり。

宮 詞

劉 後 村

先帝宮人總道裝、遙瞻陵柏淚成行、
舊恩一似薔薇水、滴在羅衣到死香、

先帝の宮人其の後生を弔はく、つめ尼
となり念佛三昧に日を送る。遙に陵柏
樹を仰ぎ見て淚行を成す。先帝の舊恩厚
くして忘れ難きは、嘗て洒ぎし薔薇の
香水の匂が尚「ウスギヌ」の衣にありて、
死する迄香氣の残れるに似たりと。

靜 姫 歌 舞 圖

藤 森 大 雅

感損翠蛾歌未調、水干衣冷淚難消、
誰言嬌態柔於柳、不許東風弄舞腰、

此詩は靜御前を詠じたもので、靜は
頼朝の所望否み難く義経を慕ひつゝ歌

舞したが、その嬌態は一見柳の如く柔
かだが、貞操は松の如く固く、頼朝以
下の諸大名に人の心の奪ふべからざる
を示した。梶原の挑みを撥ねつけた立
派な態度に作者は感じたのである。

明 妃 曲

高 野 蘭 亭

邊關萬里白榆秋、

窈窕雲鬢獨自愁、

一曲琵琶猶未畢、

風沙吹上玉樓頭、

王昭君が匈奴に嫁せし故事を詠ず。萬
里も隔りたる邊塞の外、白榆の黃落す
る秋に當りて美人の明妃は獨り自ら愁ひて
あり、せめて此愁をかきやらんと、一曲
の琵琶の未だ畢らざるに、風沙は吹き上
りて美しき玉の「カンザシ」を汚すなりと。

清 平 調 詞 三 首 錄 一

李

白

雲想衣裳花想容、春風拂檻露華濃、
若非群玉山頭見、會向瑤臺月下逢、

清平調詞句句牡丹を詠ずるもの、
て是れ句句楊妃を詠ず。楊妃は本と環肥
を以て名あるもの、牡丹の豊艶真に相

配するに足る。味は語意雙關の處にあり、
若し一分折し来つて、某句は牡丹を指し
某句は楊妃を指すと云はゞ則妙義索然
として盡く。善讀の者は宜しくその即
かんと欲して仍離れ分つも合はざる處
に於て、仔細に咀嚼を爲すべきなり。

此詩玄宗が楊貴妃を思ふ情の切なる
を述ぶ。雲を見ては美人の衣裳を想像
し、花を見ては美人の容姿を想像する。
終始美人の事ばかりを思ふて居る。殊
に今は春風百花の好時節なるをや。此
の如き美人は若し辭玉山上か瑤臺月下
にて逢ふにあらざるよりは、到底人間
界にて見るべからずと。

妬花歌

清 唐 白 虎

昨夜海棠初帶雨，
佳人曉起出蘭房。
問郎花好愛額好，
佳人聞語發嬌嗔。
把花揉碎擲郎前，
請郎今夜抱花眠。

數采輕影媚欲語，
折來對鏡比紅粧。
郎道不如花窈窕，
不信死花勝活人。

COMPLIMENTS

of

NATIONAL GROCERY CO.

MESA, ARIZ.

WHOLESALE-QUALITY GROCERS

★詩 未完断想稿

マツイ・シユウスイ

(1)

ひとり道遠ふ
旅の病ひの夕まぐれ
泥濘したたる人生の波止場に
わが溜息は杖と佇む。

(2)

暮れはて
波路を尚ほも辿らむか
越え行く荒波はいとはねど
あゝ 何方ぞ わが宿りは。

(3)

まなこ閉づれば
もつれ髪 鬢に結ふべく

微風は足音を立つれど

あなあはれ 身の故に星も照らさず。

(4)

過ぎし日を

今もまた心に問へど

爲す術知らじ・覺りえじ

あゝ われを啞者にさせむか。

(5)

白眼視される

この冷たき夢の中を

實^{ミナリ}なき冬の中を

あゝ

われ如何に生き抜かん。

保壽屯雜記 (一)

時事寸感

松原信雄

我々同胞が戦火に追はれて加州を後に、此處アリゾナの沙漠ポストンにかりその住居を構へて悪戦苦闘を續けること二ヶ年有半、漸く住みよい社會を築きあげ、戦争終結迄はと安住の心を定めてゐた人達が多かつたのであるが、突如センター閉鎖の計劃が發表された。再び我等は此處を追はれ、家なき家と、生きる爲の職を求めて何處へか出て行かねばならないのであらうか？

我等は何處へ行くべきか？ 何を爲すべきか？ 同胞各自が断平たる決意をせねばならぬ秋である。この時、一番最初に閉鎖されると云はれてゐるトパス参事會の發議で、各センター代表者會議がWRA承認の下に、塩湖市に於て開かれやうとしてゐる。之に對して「そんな必要はない。黙つて頑張つて居ればよいのだ。」とさも賢さうな放言を爲す人がある。又、「人物は居ない。〇〇は娑婆ではどうであつた。××はかうであつた。」云々と蔭口を叩く者がある。之等反對説を囁く蔭武者共は實は同胞社會の攪乱者である。好むと好まざるを不問、ポストンの代表機關たる参事會が議決し、そして多数者が賛成せるもの

に對し、敢て反對の言動を爲す者は同胞の歩調を亂し、目的の達成を妨碍せんと意圖する憎むべき背徳者と烙印を押してよいであらう。若し彼等の反對論が眞に同胞社會の爲を思ふ至誠より出たのであれば、男らしく参事會に出頭するなり、公開演說會を開くなりして正々堂々と所信を披瀝して一般同胞の嚴正なる批判を仰ぐだけの眞勇を發揮すべきだ。又、参事會を非難したり、人物がないなどと、他を漫罵して心ある人から指彈されるよりは、自ら参事員或は代表者となつて同胞の爲、社會の爲奉仕すべしである。同胞の爲起つて働いてくれる人こそ尊敬さるべき人物である。假に智者であり「エライ人」であつても唯我獨尊的態度を構えて、同胞社會の爲に盡力しない人を我々は尊敬しない。今こそ我等に必要なのは立派な指導者だ。同胞の先頭に立つて前途に横はる茨の道を切開いて我等を導いてくれる眞に勇氣がある人物をこそ我等は要望してゐるのだ。

神ならぬ人間に完全無缺な者はない。民衆の指導者といへど結局人間なのだ。間違ひや失敗は避けられない。だが、その誤りを改め、民衆が彼を支持し協力してこそ立派な仕事が可能になるのだ。如何なる偉人たりとも一人では大業を成し遂げることはできない。

根據なきデマを口にしたり、無責任な放言を爲す前に我々は如何なる人間であるかを三省し、責任の重きことを自覺したいものである。

俳句四人抄

関 五松

土人住む苦屋並びて枯野徑
豚柵にしたりがほなり寒鴉
小春日の庭にあぶなきあんなかな
甘藷堀れば後隨いて来る小雀かな
落葉して出入り明るくなりけり

トバズ 島本巽村

めでたさや双兒生れにし家の春
雑煮碗少し飲けしもめでたけれ
春めくや颯爽として歸休兵
春雨や縄飛びの子の赤スエタ
毛を半ば刈られて山羊や春寒し
切れ尻やにべなく柵は峙てり
色褪せし瓶の造花の春埃

サクラエー 駒井

黙禱の囚衣に映ゆる初日影

赤十字の記念碑コロドの静流を見て

ハート山 藤岡無隠

初み空大コロラドの淀みなく

詩

自 然 と 悲 哀

蒼 逸

○北伊戦線の 夢醒めて
夜は深沈と 眠られず
孤閑に惱む 若き妻
○想へ冷たき 塹壕に
朝夕暮す 夫の顔
青き月影 覗き込む
○遠き異域の 秋の野邊
風蕭條と 吹き過ぎて
荒廢の跡 たゞ偲ぶ
○壯麗たりし 家いづく
想思の人も 離れ去り
生死も識らず 彷徨うか
○幽音悲調 人の世は
あゝ堪へがたし 痛ましき
運命われら 擔ひきて
○されど自然を 顧みよ
天は悠々 森静か
神の慰安は 此處にあり。

(一九四四年十一月)

満座那吟社句抄

土屋天眠

征きし子の寫眞見入りぬ寒燈下

枯草へ昔土人の住みし跡

枯草や礎残る寺の跡

冬雲や闇にカヨテの吼ゆる聲

寒燈下母すこやかに手内職

山崎琉璃女

寒燈下兵の子に書く假名文字

初孫によき名さがすや冬灯

残菊に別れ惜むや句の友と

手仕事に母娘いそしむ寒燈下

まろび草つと止りけり四辻に

山口牧村

又一人去りたる空の夜寒かな

雲間より聳ゆる嶺々や雪日和

見せ合へるキヤンプ便りや夜長宿

住みつきて久しや菊の便り來し

移る日に葉はむホプラ葉濃く薄く

小坂静子

鉄柵を後に枯野の旅にあり

枯草を轉がす風に向ひけり

若者は去つて軒端の蔓枯るゝ

聲高に美しき娘の氷賣り

砂糖少し足らずとも嬉しいレモン水

木村白嶺

干してあるけものゝはや冬の雲

まろび草まろび／＼て鉄柵に

冬雲や霞にかゝれる大カヨテ

速きありのろきもありて草まろび

ゴルフ球秘めし草原枯れにけり

永井翠敏

絲瓜蔓素直に枯れて仕舞ひけり
枯れく／＼て莖のかほそき思草
近づけば枯草けづり荒々し
山の日に枯草波の美しき
やらく／＼と簷の枯蔓風情あり

山田天民

おちこちに餌あさる鶏や草枯る、
冬の灯や枕元なる藥燭
灯に雪崩の音のけたまし
吹きよせしころく／＼草や鼠の上
昇りてはなびく芥火草枯る、

山田耕人

獵犬の忍び構へし枯葎
星章の窓やかすかに冬灯
寒燈に讀書の膝を寄せにけり
セラ深くとざす冬雲怒りそむ
冬の雲疎にキヤンプ日和とや

望月奇風

娘の膝に眠れる猫や冬灯
老友と昔語りや冬灯
手を出せば月の碎くる清水かな
山登り岩間に清水見つけたり
色褪せし筑波根草や峯は雪

上村若舟

冬の灯のところく／＼や山の町
黙し聞くニースや寒の燈更くる
野邊の家あか／＼灯る寒夜かな
初冬やキヤンプを後に友のバス

安田北湖

寒燈を離れてバスの灯となりぬ
我のごと妻も度せたり秋三年
鶴慶の翁二人や暖爐燃ゆ
父は父子は子の心菊枯る、
秋風や巨岩聳めくセラの谿

ポストン
文藝

歌壇

永瀬 勇 選

極月歌會詠草集

順序不同

川口師細川夫人と共に山登りしを偲びて、

春近き山に友等とアリゾナの石を拾らひし日を偲びをり。

山の上にま晝いたゞきし辨當のうまかりしをばいまだ忘れず。

岩山のなぞへに生ふる姫小松吾れは根こじて持ち歸り來ぬ。

師の君が活け給ひつる大盤の小松目出度く枝榮えて見ゆ。

外谷 千代

早朝の祈りを終へて歸る路屋根に光れる霜すがすがし。

紅の小菊の花の色はえて秋も終りのさ庭あかるし。

未ながくおぼえおかなむと別れゆく恩師の面影を見詰りをり吾れは。

クリスタル市

川原 八重子

ネブラスカ 赤屋さと

降る雪にぬれつつ夫が著堀れば吾れもはげみて籠に拾ふなり。
半綱とり馬おふ聲もすこやかに吾子はポテトを運びをり畑に。
後ろより上衣のほこりはきやりつつ張りてたくましき吾子の肩見つ。
雪のふる今宵を吾子はつひにかも召されて遠く旅立たんとす。

鈴木 緑松

霜ふりて庭の木の葉の黄ばみつつ秋もやうやく深からむとす。
冬さりていたくさびれし假宿の庭にきらめきて今朝は霜あり。
ひんがしの空の黒雲うつろひてとよさかのぼる大き朝日は。

児玉 なを

うづたかき落葉の上に小鳥の糞日にかわく見えてひそけし雑森は。
炭焼くと竈に生木は積まれあり木洩れ日よはき雑森の奥處に。
冬枯れの木末に遊ぶ鶉ゐて近づく足音に舞ひ立ちにけり。
ふもとべに黄葉つらなる向山をまじかに望つつ今日は遊びぬ。

貴家 まま子

冬枯れの木の間はあるかに人三人語らふさまを手の振りに知る。
去り行きし予らが残せる品々にまなこふるれば想ひしじなり。
訪ひませるよろこびよりも尚ほ君の去り行く時を惜しみ吾が思ふ。
瞬きの間に襲ひくるわがはひのかなしみは遂に消る日なからむ。

新墨洲山岳地帯を通りて、

見廻すに耕地もあらうインデアンの生活たつきをあやしみ村落過ぎにけり。

幾何いくばくの胡椒作りてインデアンは生活營えいむかこの山岳やま深く。

インデアンの常食ならむ軒先につるし干したり胡椒赤々と。

柳 本 錦 子

勘須磨舞踊の夕べを見て、

勘須磨の舞踊の夕べここにして見ることに會ひ心たのしき。

元録の花見を今に振り袖こ二十五人の乙女舞ひまふ。

笛たいこ嘶子賑はしく元録の娘舞ひ踊る両花道に。

内 堀 三 太 郎

臼を作り杵も作りてもちひつき平和の神に捧げまつらん。

今宵また五十七人が徴めされゆくバスの燈火あかりの闇に消えたり。

南國の冬のま晝日やは和らかしふたゝび此處に住すまふ吾が背に。

矢 形 溪 山

暗雲低迷くもひきフオートシエルダンの衛門に立つ子残して母は離り得ず。

感謝祭の朝のひそけさや窓の外に降り積む雪の音きこゆなり。

ありし日の影像おもかげまみにうかび来て思へばあはれ君いまはなし。(和氣湖月氏を偲ぶ)

永瀬正臣

支那人と偽り外部に働ける友のさもしき心なげかゆ。

久にしていとまを得たるけやすさに小春日和の川べりをゆく。

朝寒の庭に葵のかじけつつ咲き保てるをあらはれとは見つ。

クリスマス来はきつれども戦時いまはさびしき家族も多くありなむ。

赤松傳代

朝顔の垣根の下に清らかに三輪咲けり白の小菊は。

再會を待ちぬたまひし母君に戦死の報は如何にひびきけむ。

生國のため生命捧げしつはもののみ靈は永久にまつり申さむ。

年田静子

オレンヂの色づく頃はことさらに残せし家のをもほゆるかも。

艶人の舞ふに見惚れて観衆はひそまり深し夜寒の廣場に。

清時文子

三年過ぎし開戦の日のあしたなり何にたとへむ彼の思ひ出は。

世をこめてたたかひたけき其の中に時に思ふもこの安住を。

クリスマスま近となりぬて女等の唱ふ聖歌のこゑも朗らに。

クリスマスも聖歌唱ひて待つらしき子等の心は樂しかるべし。

夫退院す、

大園晴子

吾が夫の退院の日にはじめてを病みぬししらせ姑に書かむとす。

夫病むを秘めては姑にたよりせし心の率らさいまにおもはる。

おん姑のみ返しの文讀みながら心慰みて涙わきくも。

思ほへば十月あまりをやみたりし夫へのつとめ吾が仕をへたり。

北林静江

はらはらと枯葉落しつづ櫓の木にま晝賑ふ小鳥の群は。

旅先きより召されし吾子のつゆ荷が今とゞきたり吾が門の邊に。

今しがた届きし荷より取り出しし衣に吾子の移り香のこる。

デシバー 安井静女

祈りにふれ思ひ出づるも汗しつづ土耕せしわが家の畑を。

店先きに飾る林檎や梨見ればそゞろ思ほゆ吾が里の秋。

休暇得て吾娘はもいとし二千哩をこの假宿に度ると言はずや。

永瀬 勇

此空に光りひろごるは雪雲か日射しかたもきて透る冷えあり。

秋雨がぬらして過ぎし葉畑の緑ひとときは眼にさえざえし。

洗はれて朝の厨の灯の下にうづたかくあるすゞしろの雪え。

歌會後記

クリスマスと新年とを目前に控へての今日の歌會は大変淋しかった。

矢張り何處の部落でも同じやうに 祭日を迎へる準備のため 婦人達の

總動員で メスの裝飾やう 造花の手傳ひやらで多忙を極め 餘席を餘儀

なくされた方が大部分であつたらうと思ふ。其れでも集る者十一名 皆

眞剣な態度で本年度最終の歌會を持ち得た事は幸ひと言はねばならぬ。本年も

曲りなりにも斯うして一回の休會もなく歌會を續けて來られた事は 外でもな

い皆歌友諸君の熱意の致した處であつて 今更ながら諸君の 愚生に興

へられられたる多大の御協力と御同情とに感謝する次第である。顧るに今年も

幾人かの歌友を身邊から遠く送り出した。誠に寂しい思ひである。併し又一方

幾人かの新人を迎へ得た歡びにも會ふた。既に新聞にも發表され當地に於て

は所長より報告のあつた如く 此戦時轉住所も愈々近い將來には閑鎖される事にな

り 加州歸還が許されることになつた。従つて此處の我々の生活も長くて後一年

位のものかも知れない。其れにつれて吾等がこの歌會の運命も左右され

る譯で 来年は何回位まで續けられることであらうか。いづれ又皆思ひ

思ひに自立の道を求めて ちり／＼になつて行かねばならぬだらう。あ

る者は作歌からも遠ざかつて仕舞ふかも知れない。併し若し諸君に作歌

と云ふ事に對する理解がついてゐるならば其う容易に止められるものではなく却つて作歌することによつて 今日此處にたのしい歌會を持つたことなども一つの思出として諸君の胸中に浮んで來 友の誰彼を偲び合ふことも出来るのである。つまり短歌を通じて何時までも友情を保つと言ふことは萬更ら無意味な事でもない様に思ふ。そこで前言つた如く轉住所の生活ももうあまり長くないのであるから 今此處にある間に出來得る限り短歌に對する理解を深めて置き度いものだと思ふ。歌會後記としては聊か長すぎたが 以上本年最終の愚感として一寸述べた譯である。 尚未筆ながら 迎春に當り諸君の健康を祈ると共に益々作歌の上に進進あらん事を熱望する。 (四四、一三、二三、記ス)

北原白秋の歌

數首

碓氷の春

碓氷嶺^{うすいね}の南おもてとなりにけりくだりつつ思ふ春のふかきを。

熊蜂^{くまばち}の翅^は音ががやきおびただし春山ふかく營みにける。

深山^{ふみ}山路は驚きやすし家鳥の白き雞^{けい}に我が會ひにけり。

山吹の一重が花の咲きしだる春山岸の庭鳥のこゑ。

山路来てひたすらひもじ落の葉に満ちあふれる光を見れば。

物のこゑひびかふきけばおほかたの若葉は和^なぎてほど経^たちぬらむ。

選後隨錄

あかときの日はまだ現れぬ西空に残れる月の山の端にかかる。

此作 表現の上に大きな難があると思ふ。何故斯様な間違ひに氣附かなかつたのか不思議な感がする程である。上二句がそれである。「あかとき」は夜明け時の意であるからまだ日の出てない事は解つてゐる筈。それに「日のまだ現れぬ」と重複させて言つた處あまりにも無反省ではないか。尚それが「西空に」と續けられて益々奇怪なものになつて仕舞つてゐる。不用意に讀んでゆくと西空から朝日が上るかのやうにとれる。勿論この西空には残れる月にかゝるのであるが、二三句の續け方が悪いから斯様な結果を生じたのである。

此處らの表現方に作者の一考を煩はししたいと思います。参考までに入磨呂の歌一首。「東の野にかぎろひのたつ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ。」

すれすれにきほひ駈けゆく競馬六頭刻める置物さながらに見ゆ。(鉄木細工) 何時も克明な歌を詠む作者に似合はぬ此の作は拙ない詠み振りである。

歌意は鉄木細工の置物に刻まれてある馬の姿を見て詠まれた物らしいが、この四五句の表現の仕方はいさゝか的確を欠いてゐて、爲に大きな破綻を見せてゐる。君には既に短歌は何んなものであるか、と言ふ事は解つてゐるのであるか

ら此の作はもう一度始めにかへつて改作を試みられては如何う。 第三
句を名詞で切つたのも上手がない。

十六歳で父は大洋越して来ぬ私もシカゴに行くをやまぬ娘。

此は或事柄を述べたまでであつて未だ短歌と言ふ境に達してない。 短歌
はもう一歩此の奥にあるものであつて、作者は今此處に述べた此の事柄に
よつて自分の心の中に何を感じたか、其の心の動き、即ち感動をとらへて一
首に盛り上げねばならなかつたところである。 屢々言ふ事ではあるが、短歌
は唯事柄を述べるだけのものではなく、事柄によつて起つた感動に調子をつ
けて表現されたものがそれである。 思ふに作者は未だ短歌は初歩のやう
であるが、段々と勉強して行くうちに此處らのコツも解つて来ると思ふ。 併し
特に一言して置きたい事は、唯漫然と作歌してゐては何時まで経つても
今の境を切り抜けることは出来ない。 君は川柳にも俳句にも手を出す様
だが少し多趣味過ぎはせないだらうか。 其れを悪いとは言はないが本當に
文學に對する良心があるならば、此の邊の事も一應考慮して見て損はな
いと思ふ。 何でも出来ると言ふ事は一面識者の様に見えるが、そんなもの
に限つて作品は皆一夜漬けの様な浅い味のものばかりである。

ポストン

山

柳



古川柳句解

島原潮風

それ古川柳は單なる文藝ではない。

最も日本思想に富んだ大衆文藝であつて、バツクを飲いてゐる個人々々の小創ではない。此區別をハツキリするのは俳句又短歌雜誌の論にのみ聴かないで、自分の川柳の持つ貴い哲學、感情を支持せねばなるまい。川柳只個人の作句に隨しては川柳の文藝的價値を損失する事多大である。古川柳は一狂句に非ず) 親譲りの立派な財産である。之

を整理し共同生活の明朗化を企てねばならない。古川柳に「金持と見くびつて行く松魚賣り」心の富、情操の天地それが貧乏人にも十分所有し得た江戸市民の川柳を現代人も習得しなければならぬ。

△屠蘇袋は針妙の衣くばり。

句解 年の暮に親戚や友人相互で年始の料に衣類を贈答する慣例があるが、此屠蘇袋は矢張り年末に藥師屋から屠蘇を入れて御得意先に配るもの、それを針妙が紅絹の裂などて縫つて御歳暮に贈るのであるから、針妙の衣配りと云ふべきである。(針妙は縫物を以て奉公する女) △ぬば玉を遣ひ覚えて片しまい。

句解 今迄は晝でも夜でも遊女を買ひ切るなど、いふ事のなかつた息子が此頃はぬば玉即ち箱入金を遣ふ(買す)事を覺えて片しまいをして遅く歸る様になつた。其發展振りは驚嘆する斗りである。(片しまい)遊女などを晝夜兩度に分けて其一方丈け自分一人で買切る事。(ぬば玉)は暗い寶即ち親の秘密に貯へ置いた箱入の金のこと。

△三五から夜中に出さぬ娘の子。

句解 嚴格な家庭では、娘の子が十五歳になると箱入娘に虫が付いてはとの心配から決して夜中に出さぬ事にしてある。(三五から夜中)唐の白樂天の詩「三五夜中新月色」の六句取り。

△みことのり世々に曇らぬ後の月。

句解 宇多法皇の詔、即ち九月十三夜を以て八月十五夜に次ぐ佳節として

觀月の宴會などを催すべき旨を仰出されてから、幾百十年の後迄も、御遺詔の通りに其儀式が絶えず行はれて居る。丁度其月影の曇らないと同じ様に明かに遵奉されてゐる。

△若いとてどうせう不定世のならひ。

句解 (どうせう不定)老少不定を揆つたもの。老も若きも命数は予定されぬ事。人命の頼みがいなきをいふ。

△落ちざらめやはと奥様仲人し。

句解 下郎と腰元が不義をした。早くも奥様が内々之を知つて、表向きになつては大変だ。内密に片付け様との慈悲心から、早速仲人となつて契を結ばせ、兩人に他へ落ち行く様に出來んか。是非にと去つて内證で落してやつた。同情あつて然も氣轉が利いた奥様の計らい、感泣せぬ人世にあらうか。

第五拾五回川柳句會

課題「贈物」

上野鈍突選

佳調

(順序不同)

贈物友の情の封を切り。	友達へ自慢の鳥の胸飾。	温い心に觸るゝ贈物。	孤子へ涙のにじむ贈物。	慰問茶の湯氣に黙禱またつゞき。	贈物されて看護婦よく動き。	キャタロクの中から漁る贈物。	贈物わざと名前を秘めて置き。	贈物ないお藥が届けられ。	嫁ぐ娘へ祖母のかたみの贈物。	真心の母の包は海を越え。	白髪も顔綻ばすプレゼント。	一間住み子等へ隠せぬプレゼント。
京詩	孫六	同	同	一流	竹葉	穂村	大州	桂馬	子守	里江	同	春山

開け急ぐうちも嬉しい贈物。	野心持つ人の度を越す贈物。	粗末でも贈る心を買ってやり。	非常時へ手製の品が贈られる。	贈物届いた戦地夢に見え。	頂いて後心配な贈物。	初孫へも一つふえた贈物。	親心戦地へ贈るあれやこれ。	プレゼント友の情が身にしみる。	贈物母娘は別の趣味をとり。	齡頃へ受けるに迷ふ贈物。
巴水	晚香	天眠	軟葉	次考	二葉	静江	狂月	美貴子	奉忍	竜耳

客

真心を贈るスエタの肌さはり。	贈物手製で済ます今日の仕儀。	カタロクに額集まる贈物。	贈物受けて嬉しい手製品。	逢へぬ子へ千人針を贈る母。	子澤山心を配るプレゼント。
塩出大州	難波桂馬	吉村吉乃	同	鈴木緑松	山内狂月

贈物十六弗の格です。

脇地開水

贈物涙も詰めてオバーシー。星野光葉
キヤンテンの賣子に任す贈物。吉村穂村
賞物味知らぬまゝ他所へやり。橋本京詩

人

吉里竜耳

母と娘を惱まして居る贈物。

評 此句の解釋は二様にされさうだ。

一は普通以上の贈物を如何に處置する
かと云ふ場合、又他の場合は何を彼氏
に贈るかに悩む時であるが、之を後の
解とすれば之は母娘の至極仲のいゝ、
何時も相談に乗る母である。大抵のこ
せがイルスは母なんか低脳視して相手
にせず、金だけ出させるのが普通で
あるのに此娘さんのしとやかさは母
の助太刀に手頼らんとしてゐます。

地

富田虎山

贈られた物へ返さう氣の値ぶみ。

評 特別の場合は別として贈られた

物に對するそれ相當の物を贈り返す
のが常識であるが故に、之に對して
何を何價位の物を購むべきかと云ふ
所に悩みがあり興味がある。

天

星野光葉

贈物又来る冬へ親心。

評 親心の發露に胸を打たれる。内容
の如何は讀者の心に任せ平易の中に
巧まざるが中々云はんとする所を克
分に云つてのけた所によさがある。

軸

もう嫁かれさうにダイヤを急ぐなり。

第五拾六面川柳句會

課題「全カ」

島原潮風選

天

小町谷奉君

全力の聲は漲る大東亞。

評 一人になるまで戦ふ長期戦。

地、一 速水白舟

全力の杖に明るい日が覗き。

評 戦傷も癒える見込みの松葉杖。

地、二 関 五松

土俵ぎわ反身になつた力瘤。

評 渾身のカ頑張る土俵際。

人、一 鈴木胡仙

黙念の前に銃後の人の色。

評 増産に晝夜分たぬ祖國民。

人、二 藤井孫六

百年の計東海へ國を賭け。

評 大東亜承認する迄長期戦。

人、三 稲垣秋月

縄引きに顔赤めてる幼稚園。

評 引っぱってやりたい心手にか。

五 客

懸命は男の知らぬ産み力。 安井静女

聖戦へ一億民の底力。

鈴木緑松

一億が一九となり起ち上り。

関 五松

全力のバット惜しくも空を打ち。森岡春山

登り坂ギヤス充満イッパイに古車。 松谷縁線

十二 秀

全力で押す押し及す土俵際。

森岡春山

全力を擧げて一億國に生き。

小町谷奉君

目標を睨み飛び込む體當り。

関 五松

頑張つて決勝線にぶつ倒れ。

星野光葉

國民が一塊となり立つ銃後。

同

非常時へ脱いで働くハイヒール。

松谷縁線

一億の力にちよくなめあぐみ。

安井静女

建設へ意氣の溢るゝハマの音。

難波桂馬

輪轉機宣傳戦に大童。

同

一人子へ全力注ぐ親であり。

同

渾身の聲絞りつゝべビーの泣。 藤井孫六

黙々と明日の榮えへ業を練り。土屋天眠

佳 句

全力を盡し甲斐ある優勝旗。

天賦

全力を出した競技へ旗揚げ。

峯月

國運を賭して全力世界戦。

同

全力を何處へ試さう柵の中。

牧東

全力を籠めて敲いた蠅が逃げ。

同

全力へ十六峠が邪魔になり。

同

全力を盡すにせまい柵の中。

かもめ

全力を盡して呉れる夫と活き。

同

全力の祖國へ済まぬ日向ぼこ。

春山

全力の精を加州に捨てゝ老ひ。

胡仙

全力に希望通りの本壘打。

秋月

全力に耐えずタイヤの音で裂け。

白舟

全力を注ぐ工場の黒煙。

同

恋人の前で全力出してみせ。

晚香

全力をいれた拳のやりどころ。

子守

全力で久遠の平和祈る今日。

同

全力を育見に捧ぐ母性愛。

光葉

全力を盡します手を上ぐ二世。

緑松

最善を盡して天命待つ氣なり。 芳公

全力の限り盡さん最後まで。 同

軸

收穫に微笑む汗やオバオール。

次回句會「頭痛」

締切二月十五日

課 題「外交」

締切二月十五日

新年祝吟並ニ雜詠 (蓬着ノ分)

頑張つて呉れ太陽は眞ッ東。 ミネドカ 岡田柳華

改まる年へ希望を掛けるもの。 第一館寄 新屋軟葉

賑かに雑煮頂くメスホール。 同 竹本芳公

新年雜詠

雪の湖^{ウミ}眞赤に染めて初陽光^{ハツヒカゲ}。 シカゴ 矢形溪山

元旦の御神酒に橋る新秩序。 同

廻禮へ吹雪が邪魔する猪口の教。 同

大びらの屠蘇に酔つてる三千哩。 同

新年の客も去年と同じ顔。 鈴木緑松

初歩添削講座

島原潮風

課題「笑ひ」△原句○添削句

かづを

△笑談も中に何やら解けぬもの。

○笑談の中にも何やら解せぬもの。

鈴木緑松

△汗をふき笑つて貰ふ優勝旗。

○汗をふき笑つて受ける優勝旗。

△地圖の色笑つて置けぬ時に合ひ。

○地圖の色笑つて居れぬ昨日今日。

△此人も泣いて笑つて爺となり。

○初孫の笑顔へ祖母の目も笑ひ。

○初孫の笑顔へ祖母の目を細め。

△朗かに笑顔で通ふ幼稚園。

津村汀村

△笑ひ聲愉快に暮す果報者。

○愉快げに笑つて暮す果報者。

△退院も近い病友笑ひ聲。

○退院も近づき病友笑ひ聲。

△成績簿母は俄に笑ひ顔。

沖津かもめ

△縫ひ上げた晴衣にほゝえむ娘の姿。

安井静女

△母そつくりの小言ママ事兒に笑ひ。

○ママ言に母の小言の兒を笑ひ。

△何がおかしいか向ふの娘が集ひ。

○笑ひ聲聴いて向ふの娘等集ひ。

△賑かな笑つきぬけメスの窓。

○賑かな笑ひが洩れるメスの窓。

谷本晚香

△女店員質素の中にある笑くぼ。

△健康な母へ幼兒の笑ひ顔。

○健康な幼兒へ母の笑ひ顔。

△希望への老も笑顔に年を越し。

○希望への老も笑顔で年を越し。

星野光葉

△笑はした過去懐しい夜會の灯。

○笑はした過去偲ひ出す夜會の灯。

△亡き妻の笑顔に似たる子の笑くぼ。

○亡き妻の笑顔にそっくり子の笑くぼ。

関 五松

△孫中にどつと揚つた笑ひ聲。

○取巻きの孫を笑はす隠し藝。

次回添削講座課題

数

締切二月十五日

川柳と獨創

(十月號より続く)

先日も或閨秀作家が或人の句を評して「彼の句には品位がありませんね! あんな下品な人々は作らぬ方がよい。」と云つて大分問題となつてゐるが、川柳は詩であり、道徳と必ずしも一致するものゝみが川柳ではない。人生詩としての川柳なれば、世の中に美談があるのと共に醜行と稱すべきものがある筈である。美醜に關せず人生の在るがままの姿を、文字の上に再現してこそ初めて詩であり、文藝である。批評は自由である。私は是を拒むの

理由は持たない。然し乍ら批判を爲すには少くとも、川柳其ものとしての、詩の内容と表現、修辭と調子より見て批判すべきで、道徳或は宗教、倫理と照し合せて以て批判すべきでは決して無い。尠し脇道にそれたが前に戻つて、此倦怠第二期を突破すれば占めたものである。其以後は只模倣性を止めて、獨創性を發揮して自分自らの句、他をして模倣せしめ得られぬ着想と修辭と調子を完成すればよい。云ふ事易くして行ふ事難きは凡此獨創に及ぶものはあるまい。今度は大學に入學して自ら研究すべきである。研學し自ら大悟徹底し得て、初めて、オリヂナリイチイに富む川柳が生れるのである。世に川柳する。夫れ獨創にして初めて川柳としての價值を生じ来るもの。諸子! 獨創の句を詠ふべく努力しやうではないか。(完)

文藝協合晚餐会出席者署名

野田夏果 升谷千代 有田女子
田中松馬 功本義之 貴家志子
猿坂則子 廣戸静香 柴田よし
大妻世津 大園晴子 石丸照子
松尾松太郎 森松伸子 芥口年子
全中 技西 中重 大地幸恵子
田中あや子 松原定雄 松原静枝
松原静枝 不在 平九川 静洋
井上政次 稻垣国次 堀田須磨子
外川明久 野大道 大空 斜
中島一 新理法作 井上二子
赤青王 吉伊藤四郎 左岡隆一
逢坂嘉龍 出口泰三 解江 栄力
又島山実雄 永瀬正臣 鈴木正志
松本緑泉 藤田静子 柳本昌弘
廣井隆平 龜重久子 山西屋江
児玉久良之助 大島冬子
重安初枝 一井 子 恒吉盛花
織田きのこ 安石時子 吉里一電
児玉成 秘垣 扶傳 津村篤司

藤原信雄 松原信雄
 本木良夫 西田花子
 福山雄一 川崎雪太郎
 北村俊夫 久島美沙子
 谷口清 有田百木
 角田常田力 石原久
 中山春子 長谷川善子
 前田照子 五十位淑利
 渡辺美代子 五子位淑利
 藤原勘次郎 正木良夫

貳月参日節分の夜、我等のポストン文藝協會は一級寄稿家、編輯部、印刷、製本、配本等關係者一同を招待し、割烹學校の食堂に於て晚餐會を催した。
 出席者百〇五名、午後七時半中央理事長稻垣國次氏の開會の辭を以て始められ、普通のパーティーとは趣きを異にし、先づ第一にフオークをとり、戸田、室武正副校長の腕を振はれたあたゝかいターキーデナーに一同舌鼓を打ち、それより第一式に移り、市参事員伊藤四郎氏の謡曲、参事會議長岡本實氏、中央理事野田夏泉、貴家志ま子両氏、編輯部の有田百氏等の挨拶、編輯と經營上に関する私の報告、最後に石原慈禎師の俳聖芭蕉及び古今名士の辭世の句に関する興味津津たるお話を以て第一式を終り、第二式は我等が親愛なるカズマさん、警察署長松本一満氏の快刀乱麻を断つ如きキビ／＼とした司會の下に進行され、詩吟、琵琶、尺八、獨唱、浪曲等々各界名人の磨きをかけた「穩し藝」が次々と披露され、一同は陶然として藝術境に遊んだのであった。
 夜の更けゆくを惜みつゝ、戦火をよそに、勿體ないやうな愉しい一夜を過さして頂いたことを感謝しつゝ、和氣霽々裡に開會したのは十一時半であった。尚當夜車の都合がつかず、第三より一人も出席して頂けず誠に残念であった。最後に正木翁、割烹學校、それから美しい花を下さつた入達其他晚餐會に御世話をし下さつた諸氏に厚く御禮申し上げます。
 (松原信雄記)

文協主催の晩餐會

清水次郎長外傳
創作
エヴェレットの佐渡甚三郎 (一)

芳川積三

清水次郎長の賣出し當時は、所謂遊
俠なる者最も蔓つて命を賭けて縄張り
を争つた時分だ。

次郎長が先輩として、初めから兄弟分
交際をした隣國で目ばしい親分に、西隣
り遠州に大和田の友藏、長樂寺清兵衛、
三州寺津の間之助、山一つ越えて甲州に
紬の文吉、箱根の向ふ側武州に小金井
小次郎と、大前田榮五郎などがあつた。
互對に次郎長の向ふを張つた者は隨
分ある。遠州掛須賀の鉄五郎、甲州の
黒駒の勝藏、この勝藏は次郎長に追ひ
廻されながら、死ぬ迄捕まいて次郎長
を苦しめた。度胸と云ひ腕前と云ひ、
次郎長にさう敗けは取らなかつたが、

惜しい事にやる事が惡毒かつた爲、世
間から疫病神の様に嫌はれ、どゞの詰
り重なる惡事がばれて打首になつた。

この黒駒の元の親分は竹居の吃安だ。
「竹居の吃安鬼より怖い、どゞと吃
れば人を斬る。」

と恐れられたものだ。次郎長がまだ
ほんの駈出しの須侠客者の實録を示す
遠州の秋葉山賭場開張の縄張りの定め
場で、次郎長の仁義を鼻であしらつた
爲、次郎長に小酷くやり込められその
場に居合した紬の文吉や、長樂寺清兵
衛の仲裁で事なきを得たが、初はなか
ら吃安は次郎長に敗け目を感じた。後
日次郎長の乾分柊川の仙右衛門に因ん
だ事件で清水の頭立つたる乾分の小政、
仙右衛門、木崎の啓次郎、法印大五郎、
桶屋の鬼吉、豚松等其他十人ばかり吃
安の本陣を襲つて追ひ廻した事もあつた。
その出發の時次郎長が乾分に、

「吃安はどつと吃れば人を斬るとの事だが、次郎長は吃らぬ先から人を斬ると云つてやれ。」

と言つた。この吃安も平常の行狀が悪く何者とも知れぬ者に、竹藪の蔭で闇打ちに横腹を突かれて殺された。海一つ隔つた北豆に大場の久八、唐人お吉で名高い南豆下田に赤鬼の金平、此二人は次郎長の威風街道を壓するに及んだので兄弟分となつて下風に立つ様になつたが、次郎長賣出し當時は何だ此耻け出し者とはかり侮つて屢々喧嘩をやつたものだ。特に赤鬼の金平は掛須賀の鉄五郎に頼まれて、喧嘩の意趣晴らしに頭立つた乾分八人ばかり連れ、暗夜伊豆牛臥の海岸から八里の海上を、枚を銜み八挺櫓で押渡り不意に次郎長の本陣へ斬り込んだが、幸か不幸か丁度その時、次郎長は瘡を煩つて美濃輪の別宅にうん／＼唸つて寝て居

つた。併し、金平来るの報を聞くや、布團を蹴つて押取り刃で駈け附けたが、其時既に金平は次郎長不在と知つて薄氣味悪くなつたか、急いで舟へ引返し半丁ばかり沖へ出た所だつた。次郎長は走つて来て波打ち際に突立つて、

「盗人、金平返せ。」

と大聲に呼んで地團駄踏んで口惜しがつたが、金平等は怖氣附いたか雲を霞と逃げて行つた。併しそれが爲にさしも執拗な慮がけろつと浴つた。

大場の久八とも余り仲が好くなかつた。或時何かの紛擾があつたが昔く話が纏り、其手打を富士山麓の大宮町の料理屋藤屋でやつた。久八は四五十人からの乾分を連れて堂々衆込んだが、次郎長は太政、森の石松とたつた三人で乗り込んだ。目出度く手打式が済んで次郎長は宿舎に引き上げた。併し三人と見て好機逸すべからずと不意打ち

を仕掛けないとも限らない故、その晩三人は草鞋と脚絆をつけた儘、床柱に背を凭せ掛け刀を肩にかけて寝たが何事もなかつた。後で次郎長は大政に、

「久八も高が知れたもんだ。」

と云つた。次郎長が街道一の親分になつた當時は、物情騷然たるものであつた。其頃、三州寺津の間之助の所に居つた次郎長の所へ、何者で何處から来たとも云はず立派な供を連れした武士が訪ねて来て好條件で時の政府に仕官を勧めた。之を聞くと間之助は小躍りして喜んだが次郎長は其武士に向つて、

「私の様なとるに足らない者をそれ程迄に仰しやつて下さるのは有難いが、私の爲なら即座にも命を投げ出して呉れる乾分が六百人余り居ります。其大事な乾分を見殺しにして自分だけ出世を仕様とは夢にも思ひません。私は乞食をしても乾分と一緒に居りたう御座

いますから悪しからず思召して戴きたい。併しお上の爲なら乾分と一緒になつて出来るだけの事は致します。」

ときつぱりと断つた。

伏見鳥羽の一戦に、一敗地に塗れた徳川幕府軍が大坂から船で江戸へ逃げる途中、清水港に寄港し、此處に待ち受けた薩長聯合軍のため、亦も散々の目に遇ひ海に落ちた味方の戦死者を收容する間もなく、這々の體で江戸を指して出帆した。その當時清水港には戦死者の死屍累々として浮んで居つたが、賊だと云ふので上を憚つて誰も死骸を葬つてやる者が無かつたのを見た次郎長は「生きて居れば賊でも、死人には罪はない。」と云つて、大勢の乾分に死骸を引揚げさせ厚く葬つてやつた。今清水の梅園寺にその時の幕府船手の大將で、後の明治政府初代海軍大臣を勤めた榎本武揚の筆になつた立派な石

碑が其處に建つてゐる。

明治になつて次郎長は、時の縣令の頼みで静岡監獄の囚人を使役して富士山麓の荒蕪地開墾をやつた時、囚人の鎖を全部解いて放してやつたが誰一人逃亡を企てた者がなかつたのは有名な話である。其時この開墾事業に次郎長の片腕となつてよく働いた落合銀次なる者があつた。これが大場の久八の一の乾分と云ふより金平、久八亡き後の伊豆一圓を縄張りとして幅を利かした、表向きは土木請負業の親分であつた。前置きが長くなつたが、話はこの銀次から始まるのだ。

明治廿年頃の事だ。富岳も新しい白衣を着けた十一月半ばと云へば、静岡縣下は西から吹く空風で惱まされる頃、清水港から北に當る一里ばかりある西久保の秋葉山のお祭を見物旁々、銀次が堅氣とも遊人ともつかない二十四五歳に

なる苦味走つた若者を連れてやつて来た。互に無沙汰の挨拶が済んでから、

「清水の親分、茲にお連れした若旦那は、私が日頃御頼みになつて居ります三島明神様前の「イ」と云ふ醬油問屋の若旦那、甚三郎さんと云はれる方でございます。」

と云つて若者の方を向き、この方が清水の次郎長さんだと紹介した。

「お初にお目に掛ります。私が山本長五郎でございます。銀次が何時も大変お世話になるさうです。私からも厚く御禮を申し上げます。」
と丁寧な挨拶した。

此次郎長といふ人は、堅氣の人には逆も鄭重にして頭が低かつた。一通り挨拶が済むと甚三郎に氣の利いた乾分を附けて秋葉山詣でと云ふより、近くの江尻町の遊廓に素見に出してやり、銀次は改めて次郎長に向つて、

「親分 今日参りましたのは今の若旦那の事で、親分の智慧を拝借しやうと思つてやつて来やした様な譯です。」

と云へば次郎長は、あの子供／＼した細い目を尚細くしてくす／＼笑ひ下う、

「何だ、お前の様な智慧者が、有りもしない俺の智慧を借りたいとは、可笑しいぢやないか。」

と云つた。銀次は一寸頭を掻き乍ら、

「親分、どうか眞面目に聞いてお呉んなさい。實はあの若旦那が韭山の先生の所で勉強して居りやしたのですが、去年頃から先生や親旦那に無断で家を飛び出して私の土木部屋へ轉げ込んで、金に不自由がないのですから、私の乾分には、私には決して云ふなと鼻樂を嗅ませて居りやしたものですから、氣が附かなかつたのですが、天城新道工事の湯ヶ島の部屋で博奕の事から旅人を二三人傷つけたが、それが今の若

旦那と知つて私も驚いて仕舞つた様な譯合でござんす。」

「老舗の若旦那としちやい、中々威勢がいゝぢやないか。」

「えっへっへ……余り強くない癖に手の早い事は、亡くなつた小政兄ゝにそっくりですが、何分どう鼻屑目に見ても向ふ意氣ばかり強くて我無者羅だが、腕の方は余り感心出来ませんから危くつて見て居られませんか。若しもの事でもあつたら常日頃お世話になつてゐる親旦那に済みやせん。それに親旦那からも内々お頼みがありやしたものですから、強く意見もして見ましたが私の云ふ事は牛の角に蜂で聞いて呉れない。さうかと云つて痛い目に遭はす譯にも行かず、思ひ余つて親分の御分別に興りたいと思つて、秋葉山詣を口速にお連れした様な譯でございやす。」

腕拱いて聞いて居つた次郎長が、

「ウム、銀次、事に依るとこれには何か深い譯があるのぢやないか。」

「私もさう思ひやしたから、何不自由のない堅氣の若旦那が商賣往來にもない博奕など、人足と一緒になつて何故なさるかと思ひやしたら、堅氣は馬鹿らしくて嫌になつたから、世の中を七三で暮さうと思つて遊人になるのだ。」と云ひやすので手が附けられやせん。」

「まあいゝ家へ置いて見い。様子を

見て意見をして見るから……。」
「有難うございます。何分お願い申しやす……。」

真南を受けて居る岳南は冬も湿い。馥郁と香を漂はした梅の花も何時しか散つて、小粒の實を附け初めた如月のある日、今迄何事も云はなかつた次郎長が珍らしく用があるからと甚三郎を茶の間に呼んだ。

「甚三さんいやさ若旦那、今迄聴か

う／＼と思つて居りやしたが、貧乏世帯で暮から正月に掛けて色々忙がしく逐逐々になりやしたが、今日はゆつくりあんたにお聞き申し度い事がありやすから、何の遠慮氣兼ねをせず、さつ／＼ばらんに御話しをなすつておくんなさい。

「親分、何かと色々お世話になります。」

「外ぢやありませんが、三島の

「イ」と云やあ北豆でも聞えた老舗です。

その若旦那ともあらう者が、渡り者の仲間入りをして遊び廻るとはちと可笑しな事と思はれやす。長五郎の目に狂ひがなけりや之には何か入り組んだ仔細があると睨みやしたが、お差支へがなけりやーお話しなすつておくんなさい。及ばず乍ら御相談に乗りやせう。」

さう云つて、あの細い目を心持ちきらつと光らして甚三郎を見詰めた。

「恐れ入りました。お鑑識の通り深い譯がございまして、心にもない放蕩

をして居るのでございます。

甚三郎は俯向いて語り出した。

「私の母は、韭山の江戸の別家から参りました土族出の昔氣質の優しい母で、私には弟一人妹三人があります。私が物心附いてから弟や妹は時々叱言を言はれますが、私はまだ母から叱られた覚えは一度もありません。何時も私に向つて、^{おんた}はこの「イ」の跡取りだから蚤にも食はせる事が出来ない大切な體だ。と口癖の様に申されます……。思ひ出せば一昨年私の店の白鼠と云はれ、小僧の時から忠實に働いて死ぬ時迄、店の一切を切り廻して呉れた清藏爺が臨終の時他の者を遠ざけて私を枕許に呼び、

「若旦那、私は今年七十二歳で年に不足はありませんから、死んで行くのに思ひ残す事はありませんが、唯一つ若旦那のお耳に是非共入れて置きたい事がございます。若旦那、心を落着

けてよく聞いて下さい。外でもありませんが優しいあなたのお母さんは、あれは實は眞實のお母さんではありません……。あなたのお母さんは、あなたを生みますと産後の肥立が悪くて亡くなられたのです。それであなたの眞實のお母さんの妹である今のお母さんが来て下さつて、あなたを自分の生んだ子よりも大切に育つて下さつたのです。今のお母さんの御恩は夢疎かに思つてはなりません。別に偉い人にならなくてもいいから、「イ」の家に疵を附けない様にして、今のお母さんを大切に／＼にして上げて下さい。それが何より御恩返しになります……。と清藏爺がいまわの際の頼みでございます。」

と云つて私の手をしつかり握つた儘息を引取りました。

甚三郎は涙乍らに語り續けた。

「私は清藏爺からこの話を聞いた時

吃驚したよりも生さぬ仲のお母さんが、生みの子にも増して可愛がつて下すつた事を思ふと、泣けて／＼仕方がありませんでした。それから私は、この限りないお母さんより受けた御恩をどうして返さうかと日夜心を痛めました。さうだ。お母さんの生んだ弟に家を譲らう。さうするには、並大抵の事ではあの義理堅いお母さんは許して呉れないと思ひ、遂に心にもない放蕩に身を持ち崩し、父から廢嫡せられる様仕向けたのでございます。親合私のやる事が間違つて居るでせうか……」腕拱いて聞いて居つた次郎長の鬼の目が潤んだ。

「ウム……小むづかしい理窟は、わしの様ながさつ者には解りませんが、わし共の様に義利人情に生きて来た者には、こんな嬉しい話はござんせん。ようがす、あんたの身の上は萬事この

長五郎が引き受けやした……い。

と言つて次郎長は話を変へ、

「あんたが二月余り、わしの家に居る間お心附きでござんせうが、わしの處へは色々の人が出入りするから、今どんなに世の中が變つて行くかを御解りになつたでせう。これからは外國の文明開化を知らなけりや、人様の尻に敷かれる様になりやすから、幸ひ元小金井の乾分以前よくわしの所に遊びに来た角力上りの成島常吉が、今濱で仲仕や船乗りの元締になつて幅を利かして居りやすから、わしがあんたを連れて行つて頼んであげませう。少し濱の空氣に當つて外國の文明開化を見て置くのもようござんせう。

「何分よろしく御願ひ致します。」

其頃、横濱山下町地藏坂下に住んで居るから、人呼んで坂專の親分と云ふ仲仕や船乗りの親分の所に、近頃清水の客人／＼と云はれて金に切り目のい

い若者が居つたが一年ばかりしてふつと姿が見えなくなつた。

話は飛んで、千八百九十年頃、北米シヤトル市を終点として、ハリマンが東部から敷設した大北鉄道工事に、日本から多数の人々が雇用されてシヤトル市は日増しに日本人の数が多くなつて行く。新開地の常として酒場、賭博場、女郎屋等々公開されて殷賑を極め、従つて毎日殺傷沙汰が絶えない。

その頃のシヤトルにひよつこりあの横濱に居た佐渡甚三郎が現はれた。甚三郎は何時どうしてアメリカに来たのであらうか……………。

(つづく)



三大製品

大黒印 白味噌
全 寶干麴
U S 亀甲萬


弊社の 寶干麴

結果百パーセント
直接に御送り致します

デニバー市 ラリマー街三五。

羅府醬油醸造会社

3500 LARIMER ST., DENVER, COLO



武將の風格

(其四)

源義光

長谷川生

源義光は頼義の第三子で、新羅明神の社に於て加冠したから新羅三郎と稱するのである。幼少の頃から音律を好み、笙を當時斯道の名人として喧傳せられて居た京都の豊原時元に就て學び遂に其妙致に達し、閑を得れば靜寂の境に之を携へ行き、清朗の美音に心氣を溶かして世俗の外に自適するのを何よりの樂となした。武人の風懷實にゆかしきものがある。後三年の役の時彼は左兵衛佐として京都に在ったが、家兄たる義家が清原家衡、武衡を討つて利あらず難戰中なりと聞き、同胞愛に燃立ちし義光は、今は安閑として獨り都に留り得ず、朝廷に奏し行いて之を援けんこと請ふたが許されず、寛治元年遂に潔く官を辭して道遙かなる陸奥の旅に上つたのである。之を傳へ聞いた豊原時元の遺子時秋は、父亡き後は師とも親とも頼む義光の生還を期せざる旅なれば、其跡を慕ひ來り近江の鏡の驛にて追ひ着き、伴の一人に加えて連れゆかれたしと請ふのであつた。義光は「御身の信義は嬉しいが未だ若年なる上に、武勲を事とする家柄でないから」と頼りに辭退したが容易に聽き入れないので、止を得ず相共に東下して遂に足柄山の山巔まで來たのであつた。

恰も其夜は仲秋の満月で、未だ漸く黄昏襲ひ掛らんとするに過ぎないのに、既に赤き大圓の月は、蒼渺として脚下に波打ち寄するが如き峰戀の重疊たる彼

方より浮き上り、疎影淋しき峯の松、懸崖の老松、共に其濃厚な翠色を漸く夕
靄に包みて墨繪の如く、仰げば雪を頂く富嶽は寂然として夜目にもしるく雲間
に聳え、俯瞰すれば其崇高の姿を、遙に藍色に暮れゆく谿間の湖心に蘸して夢
より淡い。颯々たる松籟が頭上近く起るかと思へば、秋風は山の傾斜に傳はり
て、薄の白穂を次ぎ次ぎに揺して馳る。月が段々昇ると月光是益々冴え渡り、
碧空は愈々澄んで窮りない。義光は何事も忘じ果てたるかの如く、士卒共が白
地に黒く笹龍膽の源氏の定紋を凍め抜きたる帳幕を松の小枝にかけて張り廻ら
し、盾を敷いて陣營を造る間感興深げにあちこちと歩を移して、斯の秋の山上
満月に輝く静寂の絶景に觀じ入つて居つたが、聴て笙の音を戀し又時秋の身上
に思ひ及んだらしい。時秋を招いて共に幕の中に入り盾の上に相並んで座し、
嘗て時元から傳へられた笙の譜を胡籥の中から取出し、懇に之を時秋に説明し、
扱て朗々と笙の秘曲を吹奏して其奥義を授け、

「我はこれより戦に行けば生還は期し難い。御身は都に歸つて父祖の業を継ぎ
折角精進せられよ。それが反て此義光の爲であり、亦御身に取つては即ちそれ
が孝であり信であり、大きく謂へば國家に忠なる所以ともなるのである。」

と頻りに慰諭激勵して、其翌曉未だ濛々と立籠むる朝霧の裡で、西と東とに
袂を別つたのであつた。

此情景共に極めて清麗なる歴史美談は後人盛に之を傳承して詩歌に詠じ、畫
題に上せて歎賞措かざる所であるが、或一派の史學研究學者の説に據ると、時
元は保安四年六十六歳で没したのであるから、義光が陸奥に下つた寛治元年に
は三十三歳で生存して居つた譯であるし、又時秋は保安三年に二十六歳である。

から、寛治元年には未だ生れて居なかつたと云ふ次第になると主張して、折角の此史談を否認せんとするのであるが、併し顧れば源義光の事蹟に果して過誤ありとするならば、義光よりも史上猶重きをなさざる豊原時元父子の年代の記録に如何で全く誤謬なきを保し得るか、後者の正確なきを認めて前者の事實なるを覆さんとする代りに、何故に義光の足柄山の優秀の傳説を信じて時元時秋の年齢若くは其生年に誤算ありとなし得ざるか、其全くの真偽は吾人えを明にし能はざる所なれば、鬼に角美しき史料は國家歴史の系統に障害を及ぼさざる限り必ずしも之を抹殺する必要なきものと信ずると同時に、兒島高德の如き、隠れたる忠臣までも架空の人物なりと論談するが如きに至つては、聊か考慮に値する問題ではないかと思ふものである。

假りに百歩を譲つて前説時秋時元の年齢、時代若し確固不動の事實なりとすれば私は彼傳説を解するに、或は豊原時元自身が音樂師弟の情誼に因り、源義光の生還期し難き陸奥行きを足柄山まで見送り、此處で愈々東西に惜しき袂を別たねばならぬ。時しも満月の良夜に際會し山上の秋景又精魂に深く訴ふるものあるを幸とし、互に笙の妙曲を吹き交し、或は皎々たる月下に兩人心ゆくまで合奏して死別生別を惜みたるを、多少誤傳したるには非ざるかとも想像を廻らし得るのであるが、絶対に形跡もなき話柄なりと全然否定し去るは吾人の好まざる所なのである。

音は素と空なるが如きも、今足柄山に登りしとせんか、八百五十七年前義光の吹きし笙の樂韻は、尚餘韻髣髴として、月照らす古蹟の秋景に漂ふならんと思はるゝのである。

(完)

SHOP AT SEARS & SAVE

IMMEDIATE SHIPMENT

ロスアンゼルス市
シーヤスロバック商会

メールで
注文は
迅速で
丁寧

シーヤスで買へば
セーブします

SEARS ROEBUCK & CO

LOS ANGELES, CAL.

編輯後記

セクター閉鎖、メスホール閉鎖合併、米の「飢饉」等々々、新しい問題が次から次へと押し寄せて来るが、「大國民たる吾等」はそれ位の事でびくともしないぞ！」とばかり、泰然と構へ、所内は極めて靜穩である。こゝの處「ホストン戰線異狀なし」で目出度、目出度。○セクター閉鎖に關聯して、最近協同組合結成の聲が我等の編輯室にも聴えてきた。その代表的な聲を此處に紹介しよう。

○「我々はこの沙漠の炎熱や砂煙と闘ひ乍ら、折角數千英加の土地を開拓したのだ。此の開拓地の生みの親である我々としては、このまゝ捨て、去り難い愛着がある。又、來た當時は地獄のやうに思はれたこのキャンブですら、木を植え、草花を咲かせて外觀が人里

うしくなつたと同時に、多くの親しい知友ができて、今では新しい故郷といつた親しみを感ぜ、此處での生活を喜んでゐる人が少くない。それとは別に、出たいと思つてゐる人々でも、經濟事情、年齢、家族關係その他諸種の事情の爲、おいそれと直ぐには出て行けず非常に悩んでゐる状態である。WRAはさうした人達にこの土地と農具、それからハウス資本を年賦で貸して、協同組合―生産と消費、販賣と購買―を組織させてくれたならば、日本人はこのホストンを立派な農業都市にするだらう。機會さへ與へられたら、我々には立派な協同組合社會を建設してゆくだけの自信と力がある。」

○次辨あたりから、誰かに協同組合の理論と實際に就いて執筆して貰ひたいと思つてゐる。我々が今後何處で生活しようとも、來るべき新社會の生活原

理たるであらう處の協同組合に關する正しい知識を把握しておく必要があると思はれるからである。

○新年舞は非常な好評を以て迎へられた。編輯者にとつては無上の喜びである。貴家画伯の麗筆に成る表紙繪「改變」に對し、諸方面から質問を受けたので御伺ひした處、温厚なる貴家氏は笑つてゐてお答へになれない。それで「あの下駄の緒の切れてゐるのは、WRAがセンターをクロースするから加州へ還りなさいと舞令をかけても、我々同胞は足場（経済的地盤）を奪はれて容易には出てゆけない。さて、どうしようか？」と「明日」の爲の最善策を考究してゐる同胞の姿を象徵したものだ、と解釋する人と、今一つは、履き古した下駄（舊年・舊世界）を脱ぎ捨て、新しい決意を以て新年を迎へ、困難を突破してよりよい新世界を切開

いて行かうといふ、吾等の雄々しい決意を象徵したものだ、と解す人があります。と申し上げたが依然として氏は笑つてゐられるばかりで、それが當つてゐるとも、ゐないとも明答されなかつた。此表紙繪については、伊藤四郎氏が感想を本舞に發表された。

○二月舞には翠川氏の貴重なる文献、先覺者「岡倉天心」や谷川氏の歴史論を始め、新しい人々岡本、猿渡、羽根、伊藤諸氏の隨筆、それから芳川、長谷川西氏の物語等を掲載する事が出来たのを喜ぶたい。

○去る廿日「もはべ」の親睦會に招かれて、正木翁、有田氏そして私の三人が出席させて頂き、記念撮影の後、文藝愛好者數十名が長いテーブルを圍んで、御馳走を頂き乍ら歡談やら各自の隠し藝などで楽しい午右を過させて貰ひました。

○本協會に御寄附下さつた大岡氏(近丈)
森夫人(近)大池夫人(近)西野氏(近)上田氏(近)
松田氏(近)竹原氏(近)それから製本用ステ
ーブルを御世話下さつた前主幹矢形氏、
元統政部員河合兄、前編輯部員森西懷
以上の方々に對し厚く御禮を申し上げます。

○餘ちがあるので次號の豫告を——
創作特輯號とすべく、教氏に御執筆を
依頼してゐますが、既に林元幸盛氏よ
り力作を寄せられてゐます。乞予期待。
○本號に掲載の豫定であつた懸賞小説
二等當選、里田一郎作「志願兵」は、
藝術作品として立派な作品であるが、
時節柄その表現乃至字句に多少誤解を
招く憂ひありと認め、編輯會議の結果
甚だ遺憾乍らその發表を暫時見合すこ
とに一決した。この点作者並びに愛讀
者諸氏の御諒恕を乞ふ。

ポストン文藝

第三卷 第二號
一九四五 貳月號

編輯人

松原信雄

有田百

島原潮風

重富初枝

印刷所

ポストン印刷所

發行所

ポストン文藝協會

(統政部内)

POSTON POETRY CLUB

UNIT I CITY HALL

POSTON · ARIZONA

Vol. 3, no. 2
Feb. 1945

POSTON POETRY CLUB
UNIT 1, CITY HALL.
POSTON, ARIZ.

